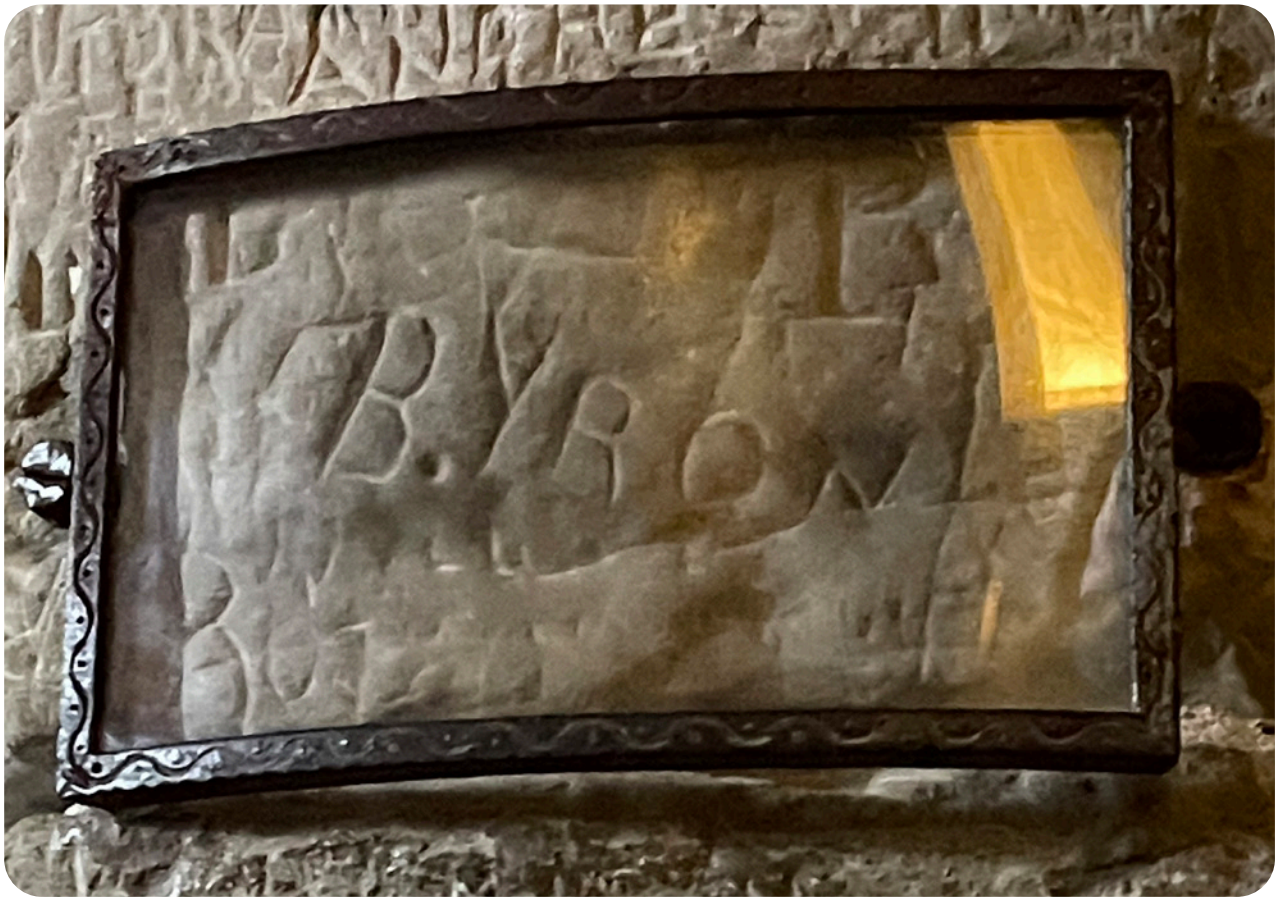
RT

College of Tourism
Rikkyo University
立教大学観光学部

no. 3



特集
観光文学

RT 観光文学 College of Tourism, Rikkyo University no.3

RT CONTENTS no.3

巻頭言

2 『廃市』への旅の記憶
松村公明

Dialogue

4 観光文学座談会
観光文学のコンタクトゾーン
──文学散歩·聖地巡礼·テクスト分析
石橋正孝×小林実×羽生敦子×原一樹×舛谷鋭×安田慎

Critique1

18 スイスのシャーロック·ホームズ巡礼
石橋正孝

Activities

25 トラベルライティングの取り組み
抜井ゆかり　舛谷鋭

Column

29 旅から始まった
渡辺憲司

Critique2

34 舞台探訪の
成否を分けるものは何か
──宮沢賢治『なめとこ山の熊』の場合──
椋棒哲也

Critique3

39 文学テクストを通した
カナダ観光体験
羽生敦子　河野美奈子

Bookguide

46 観光文学ブックリスト
観光文学研究会 編

表紙写真／石橋正孝
シヨン城がスイス有数の観光名所になった一因は、イギリスの詩人バイロン（1788-1824）の詩「シヨンの囚人」である。執筆のきっかけとなった訪問の際に彼が城の地下牢に残した署名の周りには、自らの痕跡をそこに重ねようとした無数の観光者たちの落書きがひしめいている。

特集 観光文学

人文·社会科学からの観光現象へのアプローチは、これまでもっぱら地理学·社会学·文化人類学などの分野から行われてきた。しかし、国木田独歩の武蔵野、徳冨蘆花の湘南のように、文学が新たな観光地を作り出した例が過去には存在し、今もなお「シャーロック·ホームズ」シリーズのように視覚メディアでの新たな展開を通し、「聖地巡礼」が盛んになっていたり、兵庫県、城崎温泉での志賀直哉『城の崎にて』をはじめ、観光資源として活用され続けている例も数多い。本特集は、こうした状況を踏まえ、文学による観光（文学作品に描かれた観光地の疑似体験）と観光による文学（舞台を訪れた経験による作品理解や享受の促進）の双方から、観光経験における主観的意味づけとその言語化の重要性を考えたい。

立教大学　観光学部

「ビジネスとしての観光」という視点を重視する観光学科と、「文化現象としての観光」という視点を重視する交流文化学科から構成されています。また、「地域社会における観光」という学びの視点は両学科に共通しており、観光学科は「地域づくり」を、交流文化学科は「地域のありよう」を考察することに力点を置いています。初年次教育とグローバル教育を充実させた新たなカリキュラムが2020年度からスタートしており、観光学にかかわる多彩な科目を1年次から4年次にかけて段階的に履修していくことが可能です。

〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26
https://tourism.rikkyo.ac.jp

立教大学　観光研究所

国内外の観光地や観光関連産業について理論的・実践的観点から研究するとともに、その成果を社会に還元し、観光の発展に貢献することを目的としています。「旅行業講座」(「旅行業務取扱管理者（総合・国内）」の資格取得を目的とした講座)、「ホスピタリティ・マネジメント講座」（宿泊やフードサービス等ホスピタリティ産業の経営を基礎的・発展的に学ぶ講座)、「観光地経営専門家育成プログラム」(観光振興や地域づくりを理論的・実践的に学ぶ少人数制の講座）を開設しており、学外からも多くの受講生（社会人・学生）が参加しています。

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
立教大学12号館2F 総合研究センター内
https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/it/

巻頭言

『廃市』への旅の記憶

松村公明
Matsumura Koumei

今回お届けする『RT』No.3は「観光文学」特集号である。観光文学とは何かということについては、本号の「観光文学座談会」冒頭にわかりやすく整理されているので、ぜひご一読をお薦めしたい。ここでは、文学青年とは程遠いものの、かつて四年間だけ文学部生であった時代の記憶と記録をたどり、今では「聖地巡礼」と呼ばれたかも知れない旅の経験を述べて、巻頭言としたい。

文学部の学生とは言っても、学生時代は遠近問わず乗り歩きの旅に出てばかり、本は借りても買っても下宿の畳にひたすら〝積読〟ばかりであった。そんな畳にいつも寝転びにやって来る読書家のJ君がある日、九州の柳川へぜひ行ってみたいと言う。たちまち友人のY君も加わって、一九八五年の初夏、北原白秋ら五人づれの紀行文『五足の靴』に倣えば「三足の靴が三個の人間を運んで東京を出た」のであった。

柳川は文学的に白秋の郷里として知られるが、貧しい三個の人間をおよそ一千キロ余り離れた水郷の町へと夜行列車で運ばせたのは、福永武彦（1918-1979）の短編小説『廃市』（一九五九年発表）であった。廃市というこの印象深い題名について、福永は初版後記の中で、「僕は北原白秋の「おもひで」序文からこの言葉を借りて来たが、白秋がその郷里柳河を廃市と呼んだのに対して、僕の作品の舞台はまったく架空の場所である。」と言明している。とは言え、小説の扉に書かれた「さながら水に浮いた灰色の棺」とは白秋が水郷柳河をなぞらえた言葉であるし、何より作品全体に散りばめられた水郷の情景描写は、その舞台が柳河であることを十二分に示唆するものであった。折しも一九八三年、小説を原作とする大林宣彦監督の映画「廃市」が、ずばり柳川を舞台として撮影・公開されたことは、三個の人間に靴を履かせる決定打ともなった。

当時、毎日のように付けていた〝乗り歩き日記〟には、一九八五年五月二六日、柳川到着前後の様子が次のように記されている。

佐賀11時01分→527D瀬高行き→11時31分筑後柳河　※527Dは国鉄の列車番号
筑後川の鉄橋は有名である。それを渡ると大川である。
それにしても国鉄の柳川（ママ）の駅はさびれていて、廃市の感あり。
乗船場まで歩く。辻町を左に折れ京町を通って、橋のたもとが乗船場である。
西鉄柳川駅そば乗船場→（所要60分）→沖端水天宮下船場

小説『廃市』において、語り手としての僕であるA（映画では江口）は東京の大学生で、卒業論文を執筆するためにこの町でひと夏を過ごす。Aはこの町がとても気に入って、下宿先の旧家の娘・安子やその義兄・直之に言う。

「こんな静かな、落ちついた風情のある町なんて、どこを探したって見つかりませんよ。」

これに対して、安子や直之はAの言葉を悉く否定するのであった。

「そうかしら。こんな死んだ町、わたくし大嫌いだわ。」（安子）……

「要するに一日一日が耐えがたいほど退屈なので、何かしら憂さ晴らしを求めて、或いは運河に凝り、或いは音曲に凝るというわけです。人間も町も滅びて行くんですね。廃市という言葉があるじゃありませんか、つまりそれです。」（直之）

Aが外部から来訪した無邪気な旅行者であるのに対して、安子や直之はこの町に根付くことを余儀なくされた親切な人びとであるが、両者の間には越えがたい深くて暗い水路が横たわっている。ひと夏が終わってAがこの町を去る日、「僕また来ますよ」と言うAに、「いいえ、あなたはもういらっしゃらないわ」と安子はきっぱりと言うのである。

町のはずれ、国鉄佐賀線の駅名が「筑後柳河」であったことも手伝って、私たちは福岡県柳川市ではなく、架空の場所としてのこの町「廃市」に到着したかのようであった（実際に二年後の一九八七年、筑後柳河駅は国鉄佐賀線とともに廃市、否、廃止となる）。私たちは乗船場からドンコ舟に乗り込んだ。その時のことは、小説のごとく「明るくなったり暗くなったりする水路をゆるやかに進んで行き、或るところでは柳の枝が水の上に垂れた間を進み、或るところではたくさんの藻が櫓に絡まって白い水滴をしたたらせ」た、そんな記憶に充ちている。乗船場では当時も、福岡の天神や久留米と直結する西鉄柳川駅の賑わいを目にしたはずが、「廃市」のイメージにそぐわない記憶は都合よく消去してしまったようである。

何かの役に立つために旅に出たことはないが、もし役に立ったことがあるとすれば、ゼミ生の二〇〇九年度卒業論文「「廃市」と呼ばれた町－柳川－の研究」の作成に当たり、いくらかの手助けができたことであろう。

二〇二三年末、三十八年ぶりに国鉄佐賀線・筑後柳河駅の跡地を訪ねた。跡地は「YOU・遊の森公園」と称する公園へと姿を変え、記念碑的に置かれた駅名標と案内板のみが場所の記憶を今に伝えている。広場の端に立って西に目を向けると、時間がそこだけ止まっているかのように、廃線跡が生い茂る芒の中を真っ直ぐに伸びてゆくのが見えた。

本号を携えて、新しい観光文学の世界を探訪していただければ幸いである。

（立教大学観光学部長）

Dialogue

観光文学のコンタクトゾーン——文学散歩・聖地巡礼・テクスト分析

立教大学 観光学部准教授 石橋正孝 *Ishibashi Masataka*
×
十文字学園女子大学 教育人文学部教授 小林実 *Kobayashi Minoru*
×
立教大学 観光研究所研究員 羽生敦子 *Hanyu Atsuko*
×
京都外国語大学 国際貢献学部教授 原一樹 *Hara Kazuki*
×
立教大学 観光学部教授 舛谷鋭 *Masutani Satoshi*
×
高崎経済大学 地域政策学部准教授 安田慎 *Yasuda Shin*

観光文学とはなにか、背景と特徴

石橋　『RT』第三号では、観光文学を特集することになりました。観光文学といってもまだ耳馴れない言葉かと思います。それもそのはず、これはいわば造語で、観光を通して文学を理解する、そして文学を通して観光を理解するという領域横断的なアプローチを指して本学観光学部では観光文学と称し、複数の授業を展開しています。作家ゆかりの場所や作品の舞台となった土地を訪れることで作品理解を深めることが観光を通した文学理解で、要は「文学観光」のことです。文学を通した観光理解とは、狭い意味では、観光地や観光現象が作品にどのように描かれているかを分析することで、羽生先生が本学観光学研究科に提出した博士論文「19世紀フランスロマン主義作家※1の旅行記に見られる旅の主体の変遷」が好例ですが、そもそも読書とは、他者の見聞に触れるという意味で旅と見なせますので、読書そのものが読者にどのような観光体験を提供するかを考察することでもあります。これらすべてをあわせたものが「観光文学」です。

今までこうした複合的なアプローチがあまりなされてこなかったのはむしろ不思議なくらいですが、十八世紀末に始まるロマン主義以来の近代文学は現在に至るまで、個人を、そして個人の生み出すオリジナリティを軸としていたのに対し、観光は個人よりも集団を重視しますので、文学にとって個人の敵であり、オリジナリティの反対、文学の否定に見え、両者は水と油のように思われてきたことが大きかったようです。

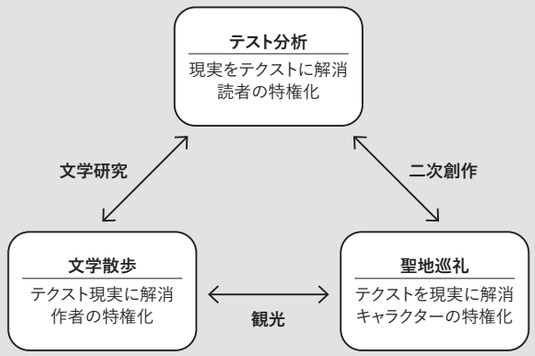
観光文学の特徴として、方法論の独自性と、中心となる対象の二点を挙げたいと思います。一つ目の方法論は、のちほど説明します。二番目の対象として、観光文学が何を明らかにできるのかといえば、それは、観光者であり読者である側の主体に生じる変容ではないか。仮に対象地域そのものは変わらなくても、そこに行ったり作品を読むことによって、観光者ないし読者としてのあり方が変わり、必然的に見方や読み方が変わり、違った風景が見えたり、今まで見えなかった作品の側面が浮かび上がってきたりします。このように観光者（読者）が観光対象（作品）という相手を変えるだけではなく、相手から影響を受けて自分も変わってしまうという事態を考察するうえで、とりわけ人類学で援用されているコンタクトゾーン※2という概念が参考になるのではないか、ということでのちほどこの点に関するお話を安田先生にしていただく予定です。

観光文学の三つのアプローチ①文学散歩

石橋　先ほど申し上げた複合的なアプローチに話を戻します。今回の座談会ではこのうち三つのアプローチに沿って話題提供していただき、それらを元に議論を進めていければと思っています。まず「文学散歩※3」と呼んでいるアプローチですが、作家が生まれた場所だったり、そこで生活して作品を生み出した場所だったり、作品の舞台にしようと訪れた取材先であったり、そうした、作家に関わりが深い場所を訪れることで、なるべく作家と同じものを見てその視線をなぞり、作家と一体化しようとする行為を指します。作品を生み出した原因、ひとつの世界を作り出す神のような存在と作家を見なし、作家を理解しさえすれば作品はおのずから理解できるはずだという因果論であり、あくまで作者を理解するための資料として作品を扱うアプローチです。これは従来から行われてきたもので、たとえば、羽生先生が博士論文で扱われた十九世紀フランスのロマン主義であれば、作家志望者はみなシャトーブリアン※4（1768-1848）に憧れ、彼が書いたオリエント紀行を読み、ガイドブック代わりにその通りに歩いてみたりしました。

「文学散歩」の大きな特徴は、ある作家が馴染みのない場所を訪れ、そこで得たコンタクトゾーン体験を、読者が作品を通じて想像的に追体験し、その延長線上にその場所に足を運んでそうした体験をなぞるという具合に、二重のコンタクトゾーン体験がそこではなされ、さらに新たな作品を生み出すきっかけにもなります。先行する作家の体験をなぞるような紀行文は、観光文学の実践に含まれます。優れた成果の一つとして、二十世紀フランスの作家マルセル・プルースト（1871-1922）の大長編小説『失われた時を求めて』を個人で全訳した井上究一郎（1909-1999）の『ガリマールの家』（ちくま文庫、二〇〇三）が挙げられます。井上によれば、プルースト文学の方法とは「土地の精霊」（ゲニウス・ロキ）との一体化ですが、プルースト自身は、自分に先行してこの方法を実践したフランス作家であるネルヴァル（1808-1855）との一体化を通してそれを会得したと井上は主張します。ネルヴァルが作品の舞台として選んだ生まれ故郷をプルーストは訪れたからこそ、「土地の精霊」との一体化を理解できたというわけです。この仮説を検証すべく、井上も同じ土地を訪れ、そのときの体験を元に『ガリマールの家』を書いた。つまり、ネルヴァルを追体験するプルースト、プルーストを追体験する井上究一郎、と三重化されているのですが、こうした重層性こそ文学散歩の特徴であって、同時に、「土地の精霊」とはその土地を作り出してきた過去の人々のことで、作家も含めたそうした死者に深く関わっていることも文学散歩の特徴と言えるでしょう。

観光文学の三角形



増淵敏之ら編『地域は物語で「10倍」人が集まる』（生産性出版 2021）

観光文学の三つのアプローチ②③聖地巡礼とテクスト分析

石橋　文学散歩は、このあとで原先生にお話いただくように、文学を巡る観光（文学観光）に含まれますが、文学観光そのものは文学散歩と聖地巡礼※5の二つに分けるべきだと考えています。聖地巡礼は「アニメ聖地巡礼」で有名になった概念ですが、昔から行われてきたことです。物語の中に入り込みたいという欲望に動かされ、主人公たちを実在の人物と信じたくて舞台とされる現実の土地を訪れる実践です。この場合に作者は邪魔で、作者がいると登場人物が虚構であると意識されるので、作者は除外したい。その意味で、聖地巡礼は文学散歩の対極にあります。コンタクトゾーンという考え方を当てはめれば、現実と虚構という異なるものがコンタクトすることによって起こる現象です。そのとき観光者の側の主体に何が起こるか、それが二次創作※6という形で表現されることになりますが、ひとつの例は小説家の大岡昇平（1909-1988）が、デルフォイという古代ギリシャの聖地を訪れたときのことを書いた、小説とも紀行ともつかない「鎮魂歌」という奇妙な作品で、聖地巡礼が生み出した観光文学の代表的な成果ではないかと思います。大岡は古代ギリシャ人と宗教を共有して

いるわけではなく、ギリシャ神話はあくまで作者不詳のフィクションと考えていて、その現場を訪れることによってフィクションをリアルに感じ、古代ギリシャ人の信仰を追体験してしまう。おかげで直後に訪れたカイロネイアの古戦場で、日本という敗戦国の兵士であった自身の体験と、敗れて亡くなった古代ギリシャ人の兵士の魂との間に、ある種の共感が生まれる経緯が描かれています。大昔の歴史も一種のフィクションと考えれば、ここではレヴェルの異なる二種類の聖地巡礼が重ねられていると言えます。

最後に「文学を通した観光」、テクスト分析です。今の文学研究はむしろこちらが主流で、作者は一旦忘れ、書かれた言葉とだけ向かい合う。作品は作者とセットになっているので、書かれた言葉だけを指す「テクスト」というフランス語由来の概念が用いられます。それによって読者は、自分とは異なるまなざしであったり、異文化や馴染みのない風土であったり、なんらかの「他」とコンタクトし、その結果として広い意味での受容が発生するわけで、そこに批評が生み出される。「他」としてのテクストと向き合う際の究極のあり方として、小林先生にお話いただくような「翻訳」が考えられます。

ロマン主義と女性の旅

石橋　まず羽生先生に、文学を通した観光理解の実例として、紀行文学から読み取れる観光のあり方の変遷についてお話いただければと思います。

羽生　私は博士論文では、シャトーブリアンという作家をはじめとしてフランスロマン主義作家のフロベール※7（1821-1880）などを扱ってきましたが、根幹としては「トラベラー」から「ツーリスト」への移行、旅の主体がどのように変化したか、しなかったのか、彼らの旅行記を通じて分析を行うことが目的でした。現時点で聖地巡礼や文学散歩を考えると、確かにシャトーブリアンの作品はのちのフランスロマン主義作家たちのオリエント旅行のルートを決定づけたと言えるものだったので、観光地化とまでではなくても、行くべきところを示したという役割は大きかったと思います。

『観光学部紀要』に「自然のマスツーリズム化について――19世紀のナイアガラの滝を事例に」（二〇一七）という論文を書きましたが、『トム・ソーヤの冒険』で有名なマーク・トウェイン（1835-1910）のほかにアメリカの女性作家マーガレット・フラー※8（1810-1850）『五大湖の夏』（一八四四）、イギリスの旅行家イザベラ・バード※9（1831-1904）『カナダ・アメリカ旅行記』（一八五六）を取り上げました。イギリス人が見るナイアガラとアメリカ人が見るナイアガラという、二人の国籍を意識して作家を選びました。女性の旅を取り上げることで、やはり男性作家と異なる感覚があると感じました。私が女性の旅やジェンダーを意識した研究を始めるきっかけともなりました。

バードは日本に三回来て、とりわけ『日本奥地紀行』（一八八〇）はアイヌ民族に会うためだったのはよく知られています。バードの旅は大きく分けて、日本を含むオリエントへの旅、そして当時イギリス植民地であったカナダのうち、英仏戦争の勝利によってイギリスが獲得したケベックへの旅があります。後者の文章はとても辛辣で、特にフランス系カナダ人に対して、着るものから何まで田舎臭い感じで、その表現には見下すようなイギリス人のまなざしを感じます。

一方、日本に対してそうしたまなざしはあまりないようです。フラーの『五大湖の夏』という作品を挙げましたが、北米大陸で先住民との出会いがあり、コンタクトゾーン体験はやはり大きいのではないかと思います。ロレッティ（先住民リザーブ、現ワンダケ）という、政府の先住民政策で作られた村にわざわざ行くのです。今もそこはケベックシティに隣接した都市型の先住民地区で、人気の観光村となっています。ここ数年、カナダは先住民族観光に力を入れているので、当時は今と違った感覚があるのではないかと思いました。

そんなバードですが、彼女の旅はコミックス『ふしぎの国のバード』（KADOKAWA、二〇一五年刊行開始、二〇二四年二月現在既刊十巻）にもなっています。主人公は本来なら四十代のおばさんですが、可愛らしい女性として描かれています。二〇一八年にJR東日本の豪華寝台列車四季島で「豪華寝台列車140年前の英国人」としてバードの旅の行程の一部が使われました。このようにバードの旅は今も二次創作されています。

時代変わって二十世紀、日本人の旅ですが、林芙美子※10（1903-1951）のヨーロッパへの旅（一九三一年）が重要だと思っています。『林芙美子 巴里の恋』を読んで彼女がフランスに行ったことを知り、『林芙美子紀行集　下駄で歩いた巴里』も読むことになりました。当時、船旅が普通だったにもかかわらず、わざわざシベリア鉄道で旅をして、しかも片道切符しか持っていなかった。ある種のロードムービー的な表現もあり、遅れてきた青春を謳歌する様子が描かれていました。芙美子は『放浪記』（ハルキ文庫、二〇一一）にあるように故郷があるようなないような、一生旅人という気がして、パリでも旅人ですが、自分のことを日本人だ、アジアから来た小娘だと卑下することもなく、旅行者から生活者へ馴染んでいく姿や、パリの日本人社会も描かれ、定住者が居たことがわかります。芙美子が投宿したホテルやアパートは現存し、何年か前に文学散歩したところ、ホテルはそのまま、アパートはホテルに変わっていましたが、芙美子がどんなふうに住んでいたかを感じることができます。アジアからヨーロッパに向かう旅なので狭い意味でのコンタクトゾーンとは、概念的に反対のベクトルになると思います。しかも女性の旅であることを踏まえると、観光文学において、研究が少ないので、今後の課題の一つになると思います。

哲学と京都のおそろしさ

石橋　それでは、続いて原先生に、観光を通した文学理解、特に京都における文学散歩とはどのような経験なのか、お話いただきます。

原　京都外国語大学の原です。私はもともとは西洋哲学を博士課程まで勉強していたのですが、十七年前に関西に越してきて、ある大学の観光文化学部に着任し数年経ち、観光学の理論研究をしようと思い始めた頃に、神戸大の先生からアニメ聖地巡礼をやらないかと言われて始めたのが観光研究のスタートです。数年後、次は宗教文化観光をやらないかと他の先生に誘われて高野山観光の調査をやりました。元々は文献学者ですので、観光倫理や観光の原理的な理論の勉強もしつつ、他方、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ※11（1925-1995）の研究者としての初志も忘れてはなるまいと、両構えでやっている状況です。

そうこうするうちに京都と文学について関心が芽生えてきました。私自身は観光者の経験に関心があり、違った風景が見えてくるとか、テクストの読み方が変わるという読者（観光者）の変容という客観的な問題も大事だと思いつつ、究極的には自分自身がどう変わるのかというところに関心があるので、ある意味では「実存的」にやっています。作品の舞台が京

多くの文人も眺めた鴨川からの山並み　撮影：原一樹

※1　**19世紀フランスロマン主義作家**
古代ギリシャ・ローマの芸術を理想とする古典主義に対して、18世紀末から勃興した芸術上の思潮のことをロマン主義と呼ぶ。時代を超えた普遍的な美ではなく、独自性を称揚する点に特徴がある。ヨーロッパ、とりわけイギリス、フランス、ドイツで盛んになった。

※2　**コンタクトゾーン**
ラテンアメリカ文学研究者であるメアリー・ルイーズ・プラット（Mary Louise Pratt, 1948-）がその著『帝国のまなざし』（1992）で提唱した概念。ヨーロッパ列強とその植民地等、力関係に大きな違いがある二つの文化が衝突し、様々な矛盾や葛藤を孕みながら相互交渉が継続される社会空間を指す。人類学を中心に、今日ではより広い意味で用いられることが多い。

※3　**文学散歩**
詩人・編集者・評論家の野田宇太郎（1909-1984）が敗戦後、近代文学の記憶が失われる前に、関連する土地を訪れてその様子を記録することを始め、自らの実践をこのように呼んだ。

※4　**シャトーブリアン（François-René de Chateaubriand）**
フランスの作家・政治家。1806年から翌年にかけて中東地方を旅行し、その時の体験を元に『パリからエルサレムまでの旅程』（1811）を執筆した。

※5　**聖地巡礼**
巡礼とは元々、宗教上の重要な場所を信仰者が訪ね歩く行動を指すが、小説や漫画等のファンが、それらの舞台となった現実の土地をめぐる行為のことも指す言葉になった。特にアニメ作品をめぐる巡礼は「聖地巡礼」と称されている。

※6　**二次創作**
原作（一次作品）のキャラクターやその背景となる設定等を流用してオリジナルのストーリーを展開させたり、活字と映像等、異なるメディアのあいだの「変換」を行ったりして、二次的な創作物を生み出す行為。

※7　**フロベール（Gustave Flaubert）**
1875年に発表した小説『ボヴァリー夫人』によって写実主義の祖とされただけではなく、20世紀以降の文学の先駆ともなった。

※8　**マーガレット・フラー（Margaret Fuller）**
19世紀の米国の女性知識人。女性の権利や先住民族の権利にも関心を寄せた。『五大湖の夏』（1843）は大自然、先住民族がアメリカ合衆国の根幹であることを再認識させる旅行記である。

※9　**イザベラ・バード（Isabelle Bird）**
イギリスのレディ・トラベラーの先駆者であり、女性として初めて英国王立地理学会の特別会員に選出された。日本への関心は高くアイヌ民族との出会いを求めて来日した後も、二度にわたり日本を旅している。

※10　**林芙美子**　ブックリスト（P.46）参照

※11　**ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze）**
フランスの哲学者。主著『差異と反復』『意味の論理学』等のほか、精神分析家フェリックス・ガタリとの一連の共著（『アンチ・オイディプス』『ミル・プラトー』ほか）で一世を風靡した。

都に設定される理由や価値など、特に京都文学がどういう社会的機能を、観光において果たしているのかも重要ですね。京都はほかの街と本質的に何が違うのか、その答えはまだ見出せていないのですが、少なくとも量的には違うと思っています。京都文学散歩は、先ほどネルヴァル、プルーストの例がありましたが、何重にもなっているのが京都のすごいところです。つまり、京都という圧倒的に狭い空間に猛烈に記憶が集積され、堀り続けるほど出てきてしまうんですね。古典文学から近現代文学までを見ると、作家の紀行文や作家・作品の研究、ガイドブックのような書籍、さらに京都文学散歩本がすでに無数にあり、京都への関心は一貫して高い。京都そのものをテクストと考える時、京都文化論を複数の思想家が書いていて、それをどう考えるかという問題もあります。なぜ人は京都を語りたがるのかという問題もあり、それに付随して、誰が京都を語る資格や権利を持つのかということも問われてしまいます。私にドゥルーズ主義的なところがあるとすれば、『プルーストとシーニュ』（一九六四）で言われているような、サイン（記号）に出会って思考が促されるという出来事を、京都での文学散歩に期待している自分がいるのかもしれないなと思います。

京都に住み始めてある程度経ち、街の構成要素として、モノも人も場所も出来事も歴史も記憶もあり、とりわけ「京都人」なるものもあるということで、この理解を深めたいという欲望から、文学散歩なり文学観光という行動をやっています。私の場合、一回のみの経験で場所を再認するだけの欲望ではないので、旅行者が行う文学散歩とその地域に住む人が行う文学散歩には違いがあるようにも思います。京都文学を歩くときの面白さは、どこの土地でもそうなのかもしれませんが、場所、モノがテクストを読むよう誘ってくるというか、日常的に圧迫してくるような経験です。自宅近くに西田幾多郎※12（1870-1945）の墓碑があり、今一つ面白さが十分にはわからないなと思っていた彼の哲学も読まなくてはとか、『源氏物語』の主人公のモデルとされる源融の別荘だと言われている清涼寺もあるので『源氏』も読まなくてはいけないかなと毎日思わされています。逆の場合もあって、夏目漱石の『虞美人草』（一九〇七）に宇治にある中国からの渡来僧の隠元が建てた萬福寺が登場し、もちろん『虞美人草』は読んではいましたが、もの本によれば「第一義」という『虞美人草』で使われる言葉が、実はそこの扁額を漱石が遊びに来た時に見つけて使ったということが書かれていて、もう一回行かなければ、となるようなこともあります。場所とテクストの「無限ループ」に入らされてしまうところが結構恐ろしいですね。あるいは、たまたま入った食事処に井上靖※13（1907-1991）がよく来ていたらしいとなると、井上靖も読まなくてはいけないかなと思ったり、祇園の白川は観光客も訪れますが、近松秋江（1876-1944）や吉井勇（1886-1960）などの祇園文学に出てくるので、歩くたびに読まなくてはいけないと思ったりしています。応仁の乱の時の槍の跡がそのまま残っている門が自宅近くにあり、気づかずに何度もそこを通っていたのですが、そうすると『太平記』を読まなきゃいけないのかもしれないなと（笑）。これは文学的な人文系の人間にとってまずい土地に住み始めてしまったという気がします。「ゲニウス・ロキ」という言葉の意味を正確に理解できているか心もとないですが、死者をたくさん感じられるのが京都の特徴で、大昔から変わらない地名がたくさんある上に、今の山並みと柳田国男（1875-1962）や田山花袋※14（1872-1930）が書いた鴨川から見た山並みは変わっていないだろうなとか、親鸞が手植えしたという八百年前の青蓮院の楠を眺めて色々と想像したりすると、有名無名の歴史上の死者たちと同じものを自分は見て、同じような感情を持っているのかもしれないと、しみじみとしてしまいます。仏像に至ってはすでに作家がいろいろ述べていますし、庭もそうですが、やっぱりそういうところは面白い。大岡昇平の話につながるかもしれませんが、観念として理解していたものに実在性が与えられるというところが面白くて、例えば司馬遼太郎（1923-1996）の『街道をゆく』（一九七一年～一九九六年）で赤山禅院について書かれていて、神道、仏教、さらに道教の三つが揃っていると言う。頭では何となくわかるが、行ってみると実際に三つ混じっているところをリアルに感じることができる。水上勉（1919-2004）の花街文学もたくさんありますが、日常生活でたまたま舞妓さんが歩いているのを見かけたりするので、虚構作品がよりリアルに感じられる。

コンタクトゾーンという概念ですが、帝国主義とか植民地主義といった歴史的な背景はいったん脇に置いて、「コンタクトゾーンにおける読者」（鈴木智之『社会志林』二〇一三）などを読むと、非対称的な力関係にある二者の間で相互的な変容が起きるという事態を、京都においてどう考えればいいのか、概念的に考える必要があります。京都という表象やイメージについては、交渉や対立を孕んでいるはずですが、本質化して固定化していくベクトルの強さもあります。あるいはメジャーなイメージとマイナーなイメージ。どうしても「日本のふるさと」といった具合に日本に回収されていくような京都もありますが、住み始めて掘り下げていくと、道教的な要素など様々なものが入っていますし、「平安時代」というオブラートに包まれていますが、掘り下げると「日本」をそもそも逸脱していくような要素や、内側から崩すようなものが京都の中にたくさんあることに気づきます。何をまなざし、何にまなざしを返されているのか、どういうコンタクトゾーンに足を踏み入れているのかということが気になりました。鈴木論文には、フィクションの文学的言説がつくる時空間は現実の潜勢態なのだと書いてありますが、ありえたかもしれない過去、今後ありうるかもしれない未来がそこには込められているわけで、死者や他者、想像的なものに触れるという文学観光や文学散歩の意義について、それが学生たちにとって究極的にはどのようなものであり、教育的観点からも考える必要があるのではないでしょうか。

舛谷　京都だと圧迫されるのですか？

原　僕はそうですね。読まないとまずいのではないかということが多すぎて。

舛谷　関東だと、武蔵野とかありますけど。

原　京都だとほんの少し歩く間にどんどん出てきてしまうというのが怖い所ですよね。

舛谷　勉強になっていいですね。

原　いいのか悪いのか（笑）。不勉強な自分を日々感じて生きねばならないという感じです。

オリエントとコンタクトゾーン

石橋　想像が現実をよりリアルに感じさせ、さらに人を動かす力を持つ、というお話でしたが、続いて安田先生に、こうした想像の積極的な作用の例として、紀行文学がどのように虚構を含み、そのことによって現実とどのようにダイナミックに関係しうるのか、中東を事例にお話いただきます。

安田　観光文学の可能性が今回のキーワードの一つになっていますが、私は現代中東における宗教メディアネットワークに加え、十九世紀から二十世紀、そして現代にかけて続いているトラベルライティングと呼ばれる現象を分析しています。特に、十九世紀から二十世紀にかけて中東を旅行した西洋人旅行者や冒険者、観光客が何を考えていたのか、という議論をしています。そのなかで、私自身は中東における観光がどのように形成されてきたのかを、旅行記を題材にして、オリエンタリズム※15やコンタクトゾーンという概念を用いながら論じてきました。

トラベルライティングであれ、小説であれ、映像資料であれ、音楽であれ、世界を舞台としたあらゆる作品やコンテンツを考えたとき、私たちの今生きる世界や地域社会からその外部を見る「まなざし」が、作品の中にも当然のように入ってくるわけです。もちろんこれらの作品は現実世界をすべて反映しているわけではないですし、ノンフィクションであってもそこにはなにがしかのフィクション的なテキストを含み込んでいます。むしろ、読者は作品を読みながら想像を掻き立てていくことで、虚構のなかに現実を見出していき、そうした期待を胸に世界に足を向けていきます。特に、西洋社会が産業革命や市民革命というものを経験している中で、十九世紀から二十世紀、あるいは現在に至るまで、近代社会・現代社会の中で自分たちとは違う他者のあり方を外部に求めていく中で、「オリエント」という姿が形作られてきま

ジョン・フレデリック・レーヴィス《披露宴》

※12 **西田幾多郎**
哲学者。『善の研究』で知られる。好んで散策したとされる京都の道が「哲学の道」として今日も親しまれている。

※13 **井上靖**
小説家。『敦煌』『天平の甍』等、特に中国の西域を舞台とした歴史小説の書き手として知られる。

※14 **田山花袋**　ブックリスト（P.46）参照

※15 **オリエンタリズム**
文芸評論家エドワード・サイード（Edward Said）が同題の著書（1978）で提起した概念。元々は東洋学を指すこの言葉によって、ヨーロッパが非ヨーロッパ文化を理解し、そのイメージを形成する際の思考様式一般をサイードは批判的に論じている。

※16 **ウジェーヌ・フロマンタン（Eugène Fromentin）**
画家・作家。とりわけ小説『ドミニック』、紀行文『サハラの夏』、美術評論『昔日の巨匠たち』で知られる。

した。そこでは「オリエント」と呼ばれる現代の中東地域が、ある種の虚構を交えながら、様々な文学や芸術作品、学術研究において主題となってきました。特に、一連の感情を掻き立てる重要なメディアとなったのが、絵画です。もちろんこの時代は出版文化が非常に発達し、挿絵であったり、ポスターやイメージ画であったりが人々の目に触れる機会が増えてきますが、これらの絵画のなかに中東に関する様々なイメージが形成されてきたわけです。

例えば、フランスの小説家・画家であるウジェーヌ・フロマンタン※16（1820-1876）は、《アラブ》（一八七一）という作品のなかで、ナイル河流域の豊かでのどかな自然風景を描き出しています。あるいは、フランス画家ルイ・コンフォート・ティファニー（1848-1933）が《アルジェリアの店舗たち》で、アルジェリアの混沌とした街並みを描くことで中東的なるものを表象したりしていきます。

その他にも、西洋社会は自らの文明の先進性を示すために、中東の混沌や野蛮さ、後進性を好んで描き出してきたわけです。先ほど羽生先生から出たジェンダーをめぐる話とも関わってきますが、ハーレムと呼ばれる宮廷の後宮が好んで画家たちのオリエントの題材として描き出されてきました。例えば、イギリスの画家ジョン・フレデリック・ルイス※17（1804-1876）は、まさしく《披露宴》（一八七三）という作品で、想像上のハーレムの姿を描き出しているわけです。同様に、西洋社会の男性の欲望や欲求を反映した、虚構を交えた女性の官能的な姿たちは、実に多くの絵画や小説の題材となっていきました。こうしたものは、『千夜一夜物語』という中東の物語の世界観であったり、ロシアの作曲家リムスキー＝コルサコフの「シェヘラザード」といった形で、視覚だけでない五感すべてを通じて表現されてきたわけです。

これらの絵画や小説において好んで中東社会が描き出された結果、十九世紀後期の西洋人たちが様々なコンテンツの中で見聞きしたものを、現実の中東社会において実際に見つけようと、躍起になっていくわけですね。ただ、現実には絵画で描かれてきたような世界観はあくまでも西洋人によるフィクションに留まるわけです。ドイツの有名な小説家、カール・マイ（1842-1912）※18が中東にはじめて旅行した際に、冒険譚集『オスマン帝国を行く』や関連する小説のなかで自分が描き出したオリエント社会と、目の前に広がる現実世界のあまりにもの違いに大変なショックを受けて、その後はスランプに陥ってしまったという逸話があったりします。

このように、中東社会と舞台としたコンテンツが増殖する過程で、虚構と現実との乖離が必然的に広がっていった時に、むしろ虚構に現実を合わせていくという話が出てきます。特に観光という場面では、絵画や小説の世界観が必ずしも実在しないにもかかわらず、旅行者たちは現実世界には絶対に対応物があるはずだ、と躍起になって観光していきます。そうすると、それらを演出する人々がなぜか出現して、あたかも現実世界に今までも存在してきたかのように、舞台が整えられていってしまうわけです。現代も中東観光の舞台で続く旧市街の混沌さやベリーダンス、タリーカ（イスラーム神秘主義教団）といったものが、西洋社会との邂逅のなかで生み出された「中東的なるもの」として、表象され続けているわけです。

こうした虚構によって形作られてしまった中東社会の姿を、怒りを込めて描き出したのが、パレスチナ系アメリカ人研究者のエドワード・サイード（1935-2003）の『オリエンタリズム』なわけです。彼は、オリエンタリズムにみられるような、抑圧者と非抑圧者という二項対立的な構図が西洋社会と中東社会の間に横たわるのだ、と断じます。例えば、レオン・コニエ（1794-1880）の《ボナパルト指揮下のエジプト遠征》（一八三五）というナポレオンのエジプト遠征を描いた有名な絵画がありますが、ここに「支配者」たる西洋社会から見た、「支配されるべき」当時の人種的な階層や世界観を見て取ることができるわけです。

ルイ・コンフォート・ティファニー《アルジェリアの店舗たち》

しかし、北米の文学研究者メアリー・プラット（1948-）は、その著書『帝国のまなざし』（Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation, 1992; 2008）の中で、コンタクトゾーンという概念を用いながら、オリエンタリズムで描き出された二項対立的な姿を乗り越えようと試みます。プラットは旅行者と現地の人びとが邂逅する社会空間について、「全く異なる文化が出会い、衝突し、格闘する場所」なのだと定義し、トラベルライティングや旅行記、あるいはもっと広くポスターや絵画とか様々なモノに邂逅の痕跡を見て取れるのではないか、という分析の可能性を示しています。ここでは、エドワード・サイードの描き出す抑圧者と非抑圧者という二項対立的な議論を乗り越えた、多様な相互作用があったのではないか、それを分析してみようという試みがみられます。

それゆえコンタクトゾーンの概念では、旅行者と現地社会の邂逅が、お互いにもっと幅広い形での正負の相互作用を内包してきた点を、トラベルライティングを分析していく過程で強調していきます。

近年ではこうしたトラベルライティングにみられるコンタクトゾーンを、広い意味で観光文学として考えようとする動きが、文化研究や文化人類学の中に出てきています。例えばティモシー・ミッチェル※19（1995-）という文化人類学者が『エジプトを植民地化する』（Colonising Egypt, 1991, 2014）のなかで、西洋人たちのまなざしを通して虚構として描かれてきたはずのオリエントや中東社会という虚構が、現実世界と化していく姿を描き出しています。その際、中東社会は単に外部からのまなざしを一方的に受容し内面化していくのではなく、戦略的に取捨選択しながら、狡猾に自分たちの社会を定義づけていくわけです。ここでは、エドワード・サイードが描き出したような、一方的にまなざされるだけの抑圧された存在としての中東社会こそが、むしろ虚構であるわけです。中東社会は、観光や小説をはじめとしたコンテンツで描き出された世界観という外部からのまなざしをうまく使いながら、自分たちにとってより心地よい現実世界を構築しています。同じことは二十一世紀に入っても繰り返されながら、常に新たな中東像が生み出され、その結果としてまた新しい観光文学であったりコンテンツが生み出されていく、そういう循環関係が出来ているのかなと思っています。

舛谷　学生とマレーシア合宿で行ったイスラーム美術館の特別展示がオリエンタリストの絵画を集めた「Mirror or Mirage」で、現実なのか妄想なのかというテーマで絵画の他、コーヒー文化やチェスの駒まで展示されていました。安田先生の話を聞いて理解が深まりました。

チェコへのコンタクトゾーンとしての『ダーシェンカ』翻訳

石橋　最後に小林先生に、翻訳や翻案を含めてテクストの次元で起きる二次創作的な展開、それが現実の土地の理解とどう関わるのか、お話いただきます。

小林　私の専門は日本近代のロシア文学受容です。ロシア文学の翻訳者とか翻訳出版を中心に考察していますが、今日はロシア文学でなくチェコの作家カレル・チャペック※20（1890-1938）について話します。

観光とどう接続するか悩んだのですが、先ほどから出ている観光者や読者の主体への影響の問題とか、場所とテクストの往復運動とか、そうしたところに関わる話をしたいと思います。私の関心は原先生のお話にあった応仁の乱の槍の跡のように、見ているのにわかっていないこと、何かずれが起きるということに関心があります。往還といってもAからB、BからAへという往還でなく、もう少しジグザグになっていくような、ずれあっていくようなところの話を考えてきました。

チャペックの本で『ダーシェンカ』（一九三二）という自分の家で飼っている犬が子供を産んでその子を育て、もらわれていくところまでを書いたエッセイがあります。非常に面白い本でクリスマスの子ども向けに作られました。いろいろデザインがありますが、初版本のチェコで出たものは黒ベース、英訳本はオレ

※17 **ジョン・フレデリック・ルイス（John Frederick Lewis）**
イギリスの画家。オリエンタリズムの画家として多くの水彩画を制作。

※18 **カール・マイ（Karl May）**
ドイツの小説家。中近東やアメリカ西部を舞台とした冒険小説のシリーズで人気を博した。

※19 **ティモシー・ミッチェル（Timothy Mitchell）**
コロンビア大学教授で、政治学者、中東研究者。

※20 **カレル・チャペック（Karel Čapek）**
チェコの作家。「ロボット」という言葉の生みの親として知られる。数々の小説や戯曲、『山椒魚戦争』等のSF的作品、『ながいながいお医者さんの話』等の童話、『ダーシェンカ』や『園芸家十二ヶ月』等のエッセイ等、多彩にして軽妙な作品を数多く遺した。

※21 **伴田良輔**
作家・版画家。性愛をテーマとした多くの著作がある。

※22 **保川亜矢子**
チェコ語研究者。言語学者。チェコ語原典からカレル・チャペックを翻訳した先駆的紹介者であり、『ポケットのなかのチャペック』という解説書を著した千野栄一（1932-2002）の妻。

ンジ色ですが、注目したいのは本のサイズです。サイズが両言語ともだいたい同じような感じです。『ダーシェンカ』は非常に人気があり、毎年のように版を重ねたので、日本に限らず、何百種類もの『ダーシェンカ』が出ています。一九九五年に最初の頃の版のデザインをそのまま踏襲したものと、全くそうでないものの二種類の翻訳が出ています。小さい方は伴田良輔[※21]（1954）監訳とありますが、下訳に手を入れたものだと思います。かなり自由気ままな、翻訳以前に本の構成そのものを大きく変えてしまっています。試みに元のものを忠実に訳した保川亜矢子[※22]訳の構成を見ますと、初めにダーシェンカが生まれてもらわれていくというところまでの話です。子犬の写真をどうやって撮ったらいいのだろうか、あれこれやってみるけれど結局失敗するよという短いエッセイ。それからいたずらっ子のダーシェンカにおとなしくしなさいと言うため、いろいろお話を聞かせるというチャペックの短い童話が八編入っています。最後に実際にチャペックが撮ったダーシェンカの可愛い写真アルバムがあるという構成です。一方伴田監訳では、はじめの子犬の生活が一切割愛されていますが、いきなり童話で、全くオリジナルのダーシェンカ・スケッチブックというページがあり、写真撮影のエッセイがあってアルバムという流れです。どういう工夫かというと、最初の童話のページを開くと、全く関係ないダーシェンカの可愛いイラストが出てくる。合わせてみることによってダーシェンカが全く話を聞かないで勝手なことをしているということが視覚的にイメージされます。オリジナルページでは、割愛された部分の挿絵も組み合わせてダーシェンカがだんだん成長して行く様子を見開きで示しています。アルバムページもオリジナルではただ写真があってキャプションが付いているだけですが、それとは別に著者のチャペックの写真と割愛した部分に加えて引用を添えます。そうすることで著者が可愛いダーシェンカに対する愛情を示しているのが視覚化されます。本を開いてカバー裏にチャペックのプロフィールがあり、それを読んでいくと晩年は迫りくるファシズムに作品で抵抗を続けたがナチスのプラハ進駐の前年に病没、三歳上の兄ヨセフは画家・詩人であり生涯にわたって彼の協力者だったが、ナチスに捕えられ強制収容所で死去したと。今までの可愛いダーシェンカの話からこのチャペックの伝記的事実、特にチャペックを語る場合必ずナチスの問題が出てきます。プラハがナチスに侵攻される前年にチャペックは肺炎で亡くなっているという事実が浮き彫りになるような構成になっている。監訳者の伴田良輔が、いつこの本に出会ったかはっきりとしないのですが、本郷の古本屋で英訳本を見つけて非常に惚れ込んだというところから出発するらしい。そして実際プラハに行った。このダーシェンカの翻訳ですが、伴田は都合七バージョン出している。先ほど最初に紹介した一九九五年版は抄訳で、一九九七年に残りの部分を『子犬の生活ダーシェンカ2』として出します（新潮社）。その後今度は二〇〇六年に一冊の小さい文庫本にまとめます（ヴィレッジブックス）。さらにこれをもう少し大きいサイズで愛蔵版というのを出します（青土社）。一番新しいのは二〇二〇年版になります（青土社）。何度も何度も出すんです。それぞれのあとがきに、自分はチェコのチャペックの住んでいたところに行ったんだという話を書きます。これらの証言を並べると不思議なことがわかるのです。まず初めに一九九五年版で、一九九二年の春に私が行ったらチャペックが住んでいた家がまだ残っていて、違う人が住んでいたけれどおおよそのままだと書いています。一九九七年の『ダーシャンカ2』ではチャペックのお墓参りに行ったということを書いています。一九九五年と九七年の『ダーシェンカ』『小犬の生活』では、いずれも一九九二年にプラハを訪れたと書かれています。しかし一九九六年一月号の雑誌『シンラ』に掲載された文章では、一昨年の初春に行ってきたのだと書いています。この年から一昨年なのか、それとも実際これは前年末に出ますから、その前になるのか、いずれにしても一九九三年か九四年か微妙にずれる。その後愛蔵版では、私が訪ねたあの夏は、といきなり夏になります。新装版では二十五年前に初めて訪れたと書いています。これを二〇二〇年十二月に書いた文章としているので、単純計算すると一九九五年になる。ちょうど咲いていた白い睡蓮の花と出ていますので、これは夏になります。二〇一五年、二〇二〇年の版では夏に行ったぞと変わります。これはどういうことなんだろう。この間の二〇一六年文庫版を読むと、二度この庭のあるチャペックの家を訪れたと出てくるので二回行ったのかと。現物を集めてみて初めてわかることですが、いつ行ったかという情報が非常にぶれる。ただ言えるのは、チャペックの家に行った、庭を見た、庭でダーシェンカがここにいたと考えた。という事実だけは多分変わらない。というよりそういう自身の行動イメージを作っていると見た方がいいと思います。経験や記憶が再編成されていく様子が非常によく見えます。伴田良輔の本の作り方というのは『独身者の科学』（冬樹社、一九八五）などで有名ですが、古いヨーロッパのエロチックな古書や図像などを集めてコラージュして本を作るのを得意としていた。彼はダーシェンカの本でも全く同じことをやっている。そればかりか彼自身の言説も同じようにコラージュによって成り立っているのがわかるのです。雑誌『マルコポーロ』の連載では「ヴィジュアル・シャッフル」と題して、日記という体裁の文章を発表していますが（一九九五年五月～九六年一月）、最後の一九九六年一月の項目に阪神淡路大震災のことが書かれて終わる。あえて一年ずれていることで、それまで書かれていた内容が、年月の記載なんてあてにならないことに気づくというか、時系列すら怪しいんじゃないかと思わせる仕掛になっている。それが何を意味するのか考えるのは難しいですが、チャペックの足跡を求めてチェコに行った伴田という人はこういういたずら者なんです。しかしながらそんなことは関係なく、彼の文章を読んで自分も行ってみたいなと思うことは変わらないでしょう。そして、一般の日本人は、そう気楽にプラハには行けないということもあると思います。日本人が行きにくい土地に関して情報とかイメージといったものをどういうふうに作り出すのか。しかしそこに様々な困難が生じるぞという問題には、人々の表象を作り出す条件と言うか限界と言うか、そういうことがあるんだろうなと。実は翻訳の問題というのは言語の違いばかりが注目されがちですが、こうした問題は大きいと思います。本のサイズといったものが大きく変わってくると、当然元々描かれていたのと違う構成にしなければならない。チェコ語から日本語になるか、英語から日本語になるかだけでも言語構造が全く違うという大きな制約があるわけですが、物理的に本のサイズが違うというのも大きな制約になる。日本とチェコという空間的な隔たりも同じような制限制約になるかと思います。こういったことがまずあり、それをいかに乗り越えていくか。ところで日本では、チャペックの家に行きたいなと思ったらプラハに行かなくても、平塚で行けます。神奈川県の花菜ガーデンと言う施設にカレル・チャペックの家が再現されています。私もつい最近知って行ってきましたが、外観だけが再現されチャペックと言うと園芸が大好きだったことで知られていましたが、『園芸家12カ月』（中公文庫、一九七五、二〇二〇）という有名な作品を書いています。これを念頭にこの建物が作られているようです。一方ダーシェンカを検索すると、愛知県の幸田に「緑と風のダーシェンカ」というパン屋がありました。二〇二二年の暮れに行ってきたんですが、ダーシェンカの挿絵を使い、メルヘンチックな感じと建物のパン屋でした。愛知県内で四店舗やっていて、石窯で本格的な美味しいパンを作っていて、地元で大変人気があるらしいです。チェコに行くとか行かないとかというのとちょっと違うのですが、ダーシェンカに惚れ込んだ人が自分でパン屋を開くときダーシェンカをモチーフにしている。伴田が『ダーシェンカ』という本に惚れ込んでいろいろコラージュしながら翻訳本を全くオリジナルに作ってしまう、そういう二次創作と言えるでしょうか。オリジナルを再現するのでなく、オリジナルにはないものをどんどん作り出してしまう現象がいろいろあるのがわかります。伴田自身はその後、ダーシェンカに触発されたんだと思うのですが、猫の写真を使った本を二冊ほど出しています。いろいろ増殖する、キャラクター化されるという意味で、様々なグッズもあります。少しずれますが、チェコという国、あるいは文化のイメージはかわいい雑貨を売っているところというイメージと結びつきやすいのです。私もオンラインサイトでマグカップを買ったりしています。それから糸井重里が二〇二〇年に「ほぼ日手帳」でダーシェンカの一九七一年版のデザインを使った手帳を出しています。アニメも二〇〇七年にありました

Dášeňka čili život štěněte
（ダーシェンカ あるいは子犬の生活）

カレル・チャペック著　1933（1932）
『リドヴェー・ノヴィニ』紙に発表された
エッセイと書下ろしの文章、自作の挿絵、
写真からなる。
クリスマスの子供向けに企画された本。

チェコ語諸版および英訳、独訳、日本語訳諸版

（TOKYO MX）。私はオンタイムで観ていないのですがＤＶＤを入手したところ、内容はオリジナルをかなり逸脱していました。ダーシェンカの友達として出てくるとか、全然違うものになっています。そして十二カ月に渡るお話として作られていますので、おそらくダーシェンカと『園芸家12カ月』を合わせて新たに作ったのだろうと思います。

原先生の京都の話で思い出したのですが、私自身の体験でチェコのプラハに行って何の勉強もしないまま、ああ楽しかったと帰ってきて、そうするとプラハとかチェコとかいう文字を見るだけで反応して、いろいろ本とか読み始めたりするわけです。そうした中で、一九四二年にプラハで起きたラインハルト・ハイドリヒ暗殺作戦、チェコを支配したナチスの将校が暗殺されるという事件がこの年にあり、その実行者たちがギリシャ正教の修道院に立てこもって六時間の銃撃戦ののち制圧されるという事件があったということを知ります。ナチスのことに詳しい人だったらよく知っていることだと思いますが、私は全くそれを知らないで、その修道院の前を素通りしていたんですね。普通に観光で買い物しに行くとき、ここにギリシャ正教の教会があるんだな、ぐらいの気持ちでいたんですけれど、後で事件のことを知って、通っていたのに、なんでもっとちゃんと見なかったんだろうと思いました。これは映画化もされていて（二〇一六）、チェコとイギリスとフランスの共同制作なんですが、公式サイトだと原題が「Anthropoid」になっている。サブタイトルは類人猿っていうのが作戦のコード名なんですが「Resistance has a codename」。そして暗殺されたハイドリッヒの横顔、これだけでチェコ人、イギリス人、フランス人には通じるということなんです。ところが同じ映画が日本で翻訳されたものは「ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦」。ここまでしないと日本人には理解できないし、見ようとしないのだろう。つまり日本人の持っているチェコの知識というのはないに等しいと思うのです。世界史でちょっと教わる程度でしょうから。それがチェコ人、イギリス人、フランス人の持っている常識と日本人の持つ知識とは大きなギャップがある。まあいたしかたないですが、こういう問題というのが先ほど本のサイズが違うのと同じようにいろんな制約みたいなものを生み出す、重要な要因となっているのではないか。これをいかに乗り越えるかというのが翻訳だと非常に苦労するところだと思うわけです。注を付けたりするのはもちろんですが、だけど映画だったら注を付けるわけにはいかないので、無理やりこんなタイトルにしてしまうようなことが起きる。文化の変容にまでかかわると思います。

舛谷　二次創作、増殖という言い方をしておられましたけれど、全部原典から訳したものだと決めてかかっていましたが、いろいろな翻訳、翻案があってそれが増殖しているということがよくわかりました。

観光学部の観光文学研究

舛谷　二〇〇六年に観光学部に交流文化学科という新学科ができたことから、観光文学研究が成立したと思っています。最初のカリキュラムでは交流文学と呼び、交流文化と対応させた必修科目から始まり、その後選択必修になりました。当時ＪＴＢが交流文化企業を自称し、交流文化賞（2005-2017、現交流創造賞）を開催し、観光学部で交流文化学科を作るというのが、社会的にもある程度通用したのですが、この概念の意味を、「交流文学」という科目を十年以上担当しながら考えてきました。今は観光文学を少し広げて観光人文学という科目にしています。現在では観光文学科目として一から五まで数字を付け、移動、ＳＦ、紀行、トラベルライティング、思想が展開されています。以前は小林先生にもご担当いただいた「旅行経験分析」、それから「言説分析」「紀行文学論」などの科目がありましたが、「紀行文学論」は日本文学専修の先生方に歴代お持ちいただき、初代は今回ご寄稿いただいた渡辺憲司先生でした。他にも「言語と社会」や「トラベルジャーナリズム論」と関連基礎科目で「文学」があります。立教は日本最初の観光学部ですが、今は全国の大学に観光学部・学科が数十あって、総合観光学部として首都圏の私大で学部から博士後期課程まであると言わないと、以前のように「オンリーワン」ではない状況です。他に強調できることとして、文学系科目をこれだけ揃えている観光学部は多分ないだろうと思います。

秋入学と春入学がありますが、秋入学だと四月までの間に英語ｅラーニングやさまざまな推薦図書を読んでもらいます。図書リストに「観光をテーマにしたエッセイや小説」という項目があり、ここに社会学部観光学科時代の卒業生、酒井順子[※23]（1966-）『観光の悲しみ』のほか、村上春樹（1949-）、沢木耕太郎[※24]（1947-）、金子光晴（1895-1975）やジュール・ヴェルヌ[※25]（1826-1905）はもちろん、須賀敦子[※26]（1929-1998）、武田百合子（1925-1993）、林芙美子や永井荷風[※27]（1879-1959）も入っています。今号ではもう少し広く、観光文学ブックリスト（P.46）を作りました

ので、そちらも参照して下さい。

観光と文学

羽生　小林先生もおっしゃっていたと思いますが、やっぱり知らないより知っていた方が楽しい。自分もそこに行ったのに知らなかったから残念な思いをしてしまうことと、でもそれに気づくこともすごく大事。私はジェンダーへの気づきと、先住民観光（民族観光／エスニックツーリズム）についてお話しましたが、先住民文学[※28]は今カナダで盛んです。もともと先住民が書きはじめたものですが、翻訳したところで私たちにどう伝わるかという問題はあると思います。まだケベックの先住民文学と観光は全然つながっていないので、これから可能性としてつなげる余地はあると思いました。

それと、Critique3（P.39）で書いた『赤毛のアン』ですが、カナダのプリンス・エドワード島は日本人ツアーに占拠されているということです。日本の『赤毛のアン』のテーマパークは北海道にありましたが、閉鎖に瀕してクラウドファンディングが行われました。メープルホームズの『赤毛のアンの家』もあるし、アンのファンは根強いのだなと最近知った次第です。

原　羽生先生の林芙美子のパリは戦前でしたか？（羽生：戦前です）戦前ですよね。舛谷先生から金子光晴の名前も出て、光晴と同世代の作家がパリでどういうまなざしを共有していたのかは面白いテーマです。研究として、あとはなんだろう。

羽生　林芙美子がいたパリの宿と金子光晴夫婦がいた宿は同じだったりします。

原　なるほど。どの作家で言えばいいかよく分からないけど、『ダーシェンカ』のチャペックの家が平塚で、『園芸家12カ月』から来たって、平塚でチャペックかと思いますが、郷土作家ってなんだろうなと思います。無理やりうちの作家ですと出しているのが結構あるというのは、どう考えればいいのだろうなと思います。逆にノーベル賞作家の川端康成（1899-1972）とか出身地の大阪の茨木には文学館があるのにあまり認知されていないとか、ちょっと面白い。安田先生のオリエントの話も勉強になって、うちの中国人の同僚のことですが、中国人が日本に来たときどういうまなざしを持つのか結構興味があって。どうも僕の同僚の知り合いのインテリ層は昔の失われた中国が京都にあると言って盛り上がったりしている。それは何をみているんだろうという疑問がある。留学生の中に日本は何かなつかしい、昔アニメで見ましたとか言い始める学生もいて、そこから言うと中国人の特に若者が京都に来たとき何になつかしさを感じているのかなというような、まなざしの向きの話はやっぱり面白いです。外部からのまなざしに合わせて自分を形成していくこと、たぶん京都ではそういうことを、京都の人が多かれ少なかれやっていそうな気がする。京都らしさに寄せたりしているのかもしれないなと思ったりしました。小林先生の『ダーシェンカ』の話で、すごく生々しいですが、コピーライトの問題はどうなんでしょうか。

小林　版権が切れてます。一九三八年に亡くなってますから。

原　使えるということなんですね。

小林　使えます。アニメはそれとして権利はあるらしいですけれど。

安田　私は別の論点から話をすることになると思うのですが、おそらくこの中で私以外の皆さんは文学であったり、人文学を研究のベースとしているのだと思います。聖地巡礼をはじめとする議論を観光研究の立場から見ると、そこでは個別の作品やコンテンツの持つ内容やイメージをある意味では単純化しながら、いかに空間とコンテンツを一対一で一致させていくのか、その中でいかに統一的なイメージやブランディングを構築していくのか、という方向性の話になりがちな気がするんです。

それに対して、今回の話では、いかに空間においてコンテンツを重層的に重ねていくのか、過去のものを引用しながら、自分のものを作り出し、それがさらにその次の引用を生み出すのか、といった系譜のようなものを重視しながら、小林先生が「増殖する」という言い方をされましたが、過去のものを消し去って上積みしていくというより、過去のものを活かしつつ重ね合わせてやっていくところに、従来の観光研究にはない視点があるのかな、と感じています。このように考えたときに、観光文学や交流文学の研究というのは、何かを踏まえながら次を生み出し、それがまた次

※23 **酒井順子**
エッセイスト。宮脇俊三と内田百閒の愛読者としても知られ、鉄道旅エッセイも多い。

※24 **沢木耕太郎**
作家。1986年から1992年にかけて発表された紀行文学『深夜特急』で知られる。成り行き任せで香港を出発点にロンドンを目指す主人公の自由な旅のあり方は、バックパッカーたちにとってひとつの理想を提示するものとなった。

※25 **ジュール・ヴェルヌ（Jules Verne）**
『八十日間世界一周』等、多くの地理学的冒険小説を書いたフランスの小説家。

※26 **須賀敦子**
作家・翻訳家。1958年から1971年まで、イタリア、とりわけミラノに滞在。この時のことを描いたエッセイ『ミラノ　霧の風景』『コルシア書店の仲間たち』が評価され、以後、エッセイストとして活躍した。

※27 **永井荷風**　ブックリスト（P.47）参照

※28 **先住民文学**　Critique3（P.39-45）参照

を生み出していくことを前提としながら進んでいくのかもしれません。

私はそれを先ほど循環みたいに言いましたが、まさしく京都は歴史のなかでさまざまなものを積み重ねていく伝統や許容する環境というものが現存していて、実際に空間の中で生き続けているからこそ、過去のものが消え去るわけでなく広がっていく。そのなかで膨大な量が積み重なっているがゆえに網羅できないという原先生の戸惑いが出てくる。そういうところを見ていくと、羽生先生の『赤毛のアン』の話で空間を変えてまた出現して、さらに積み重なっていくとか、いろいろな可能性が出てくるという面白みがあります。

舛谷　もともとのお題であったコンタクトゾーンの初出であるプラットの著作のタイトル、安田先生は「目」とおっしゃいましたが「まなざし」という訳し方もできるので『帝国のまなざし』、その副題は、トラベルライティングとトランスカルチュレーション※29という並びになって、前者は旅行記とも訳せますが、原語は安田先生のお話や学部の科目名にもありましたし、今号のActivities(P.23)でも同じ言葉が出てきます。そういうわけでコンタクトゾーンは前から知っている概念ではあったのですが、観光研究で使っていたのは移民研究に近い方でしょうか。観光プロパーな学会ではあまり聞かなかった言葉のようです。しかし観光文学研究に限らず、観光研究に引き入れてもいい概念なのではと、今回の議論を踏まえ改めて思っています。

小林　私も今日まで「観光文学」という概念をどういうふうに捉えたらいいのかと思っていたところ、紀行文学とはちょっと違って、もう少し広くいろんな方向で考えることを目指していくのかなというのが皆さんのお話でよくわかりました。私自身もあえてずらしてみたんですが、安田先生は現実が虚構に合わせていくと話されていましたが、見られる側あるいは差別される側の方が、逆に合わせていくのだと思いました。私はやはりオリエンタリズムみたいなものはちょっと嫌だなと思いながら、そっちの方が売れるのだなというところは、経験としてあります。結局日本文化を売るときに浴衣を着たりとか、江戸らしさとか京都らしさとかになるんだと思うんですが、そういう昔のイメージを持ってきたほうがお土産になるし、人も呼べるしということに苛立ちを覚えつつ、しかしそういうものを中東の人たちはたくましく利用しようとしていると思うと、ナイーブになるより売れた方がいいのかなと。

安田　日本にいる在日ムスリムが、いわゆる観光産業とかでムスリム観光客対応を進めようとすればするほど、逆にメイド・イン・ジャパンを非常に強く打ち出すようになるのが面白いです。日本の中で世界的なムスリムの連帯とか、世界共通のイスラームの価値観や文化規範を普及させていこうみたいに言うけれど、国外のムスリム観光客は全くそうした要素を求めておらず、むしろ日本固有の現地体験を求めている。その中で在日ムスリムとしての自分たちをどう表象するのか、あるいは観光活動として自分たちをどうアピールしていくかを思い悩むわけです。その時、ムスリムの信仰がベースにあるけれど、やはり日本の伝統文化をベースにしたムスリムの信仰なんだよね、というロジックが強くなっていく。外から求められているからそういうロジックになっていく部分がありつつも、それがいつの間にか内面化して、むしろ日本の伝統文化が自分たちを世界にアピールするポイントなのだとのめり込んでいくわけです。それで、日本人ムスリムの方が実は和装なり日本文化を積極的に受容したがる、という不思議な現象が起こるのです。

小林　そうですね。だからそこは相互の話になってくる。結局元があってコピーがあるということでは全然なくて。それぞれが化学反応したところで新しいものが発生し、それはそれとして浮遊していくということが分かりました。原先生にお聞きしたいのは、私は「京都人の密かな愉しみ」(NHK BS、2015)というドラマが大好きで見ていたのですけれど、あれはどこまで京都というものをちゃんと使っているのでしょう。

原　それは「京都人は誰か」問題なので、たまたま今京都に住んでいるだけの人間が語ってはいけないかなという感じがありますけど。僕も全部見ましたが、あそこはここのことかなというのが方々にあって、ロケツーリズム※30的には見る人が見ればほぼわかるのではないかと思います。主人公は裏千家のあの家の前のお菓子屋さんを使っているなとか、わかるようになっていて、場所は完全にそうだと思います。

小林　憧れと触れてはいけないという怖さとがあって、それを自分がやってしまうことの気恥ずかしさ。たとえば東京にいたら江戸っ子のふりをしたがるのは気恥ずかしい、みたいな変な自意識を私は持つのですけれど。だからよけい、浴衣を着たくないんです。日本人だから日本らしく振る舞うというのは、本当の日本人とは違うぞと。日本のことは外国人の方がよほど詳しいと思う。だから、これは常識だという言い方は、良くないと思います。知識には濃淡があるじゃないですか、普通の日常生活のときには。すべて知っている、詳しいと言うのは逆に嘘臭くなってしまいますが、研究者というのは、結局すべて詳しくなろうとするから、いかがわしさみたいなものがある。本質に迫りたいけれど、迫っちゃったら、自分が偽者になってしまうという変なジレンマみたいな問題をいつも抱えています。

舛谷　金子光晴も四十年経ってから書いているし、沢木耕太郎も十年は寝かせています。須賀敦子も『コルシア書店の仲間たち』(文春文庫、一九九二年)は十年以上経ってから書いています。生々しさを避けるために、時間の経過は一つの手がかりではないでしょうか。

石橋　原先生もおっしゃったように、京都に限らず、土地とはテクストなのですが、京都は巨大なテクストであって、そこに無数のミクロテクストが埋め込まれており、偶然そういうものにぶつかって、ネットワークが生じてくる。そして、われわれはその偶然性に勝手に自分の個人性を読み込んでしまう。それを方法化したのが後藤明生※31(1932-1999)の小説『首塚の上のアドバルーン』で、『太平記』と関連する土地のあいだの往還が物語の代わりになっています。そして、チャペックは中高生時代に個人的に大好きだった作家なんですが、あの頃は翻訳が少なくて、栗栖継とか千野栄一ぐらいしかチェコ語から訳している人がいなくて、重訳がメインでしたよね。『園芸家12カ月』にしても『ながいながいお医者さんの話』にしても。チェコ語から直接訳す人が出てきて、今まで全然訳されていなかったチャペックの作品がどんどん出るようになったのは比較的最近ですが、初めのうちこそ喜んで、出る度に買って追っかけていたんですけど、そのうちだんだん冷めてきて、チェコ語から翻訳された作品が読めるようになって喜ぶべき事態なのに、チャペックが面白くないように感じてしまい、重訳を通じて読んだときのほうが面白かったというのはどういうことか、と思っていました。チェコは馴染みがない国で、そのためのいろいろな工夫を強いられるところで、英語等をあいだに挟む重訳も、巧まずしてそうした工夫のひとつだったのだとすれば、チャペックのテクストの中にギャップを乗り越えるための工夫を促してくる力が、元々内在しているのかもしれず、重訳や翻案を通した方がチャペックの魅力は伝わるのかもしれません。安田先生のお話は、植民地主義は聖地を構築したいという欲望に動かされており、それは結局のところ妄想を現実化したいというだけの話とも言い換えられますが、だとすれば、アニメ聖地巡礼にも共通しているところがあって、そうした研究は袋小路だという人もいますが、アニメ巡礼者の欲望には植民地主義的なものが含まれているのだということになると、見方が変わるし話も広がってくるんじゃないでしょうか。Critique1(P.18)としてシャーロック・ホームズの巡礼の話を書きましたが、ホームズファンも虚構によって現実をかなり暴力的に書き換えるところがあって、場合によっては地元住民とのあいだに深刻な摩擦も生じており、そこには確かに植民地主義的なところがある。

安田　植民地主義的かどうかというのはありますけど、過去から現在まで、実は私たちは同じようなことを繰り返しているんですよね。だから逆に、アニメ聖地巡礼が現代特有の現象だと殊更に持ち上げて特別視するのに対して、いやいやそんなことはないでしょう、と強く言いたくなる。

舛谷　植民地の欲望ということで言えば、アンコール遺跡が欲しいから、フランス極東学院を作ってカンボジアを植民地にしたフランスの例もあります。

石橋　先生方のお話を一通り伺ってきて、改めて冒頭の問題、観光文学とは何か、という定義に戻ってくると、それは現実と虚構の関係を批判的かつ生産的に問い直すことではないかと思います。現実と虚構といっても二項対立的になっているのではなく、現実はかなりの部分が虚構からなっており、また、われわれにとって虚構以上に生々しい現実はないともいえるわけで、両者は常にダイナミックに関係し合っている。観光文学は、このダイナミックな力を活性化しつつ、それを批判的に対象化する二重の営みである、と定義しておきたいと思います。そこには当然時間が必要となります。方法であると同時に対象でもあるこの二重性があればこそ、さきほどから話題になっている重層性が生み出されるんですね。

二〇二三年八月二九日　オンラインで実施

※29 **トランスカルチュレーション(transculturation)**
プラットが『帝国のまなざし』で用いた概念。ある文化に統合された文化がそのことを逆用して新しい文化を生み出すこと。

※30 **ロケツーリズム**
コンテンツツーリズムの一種で、映画やドラマのロケ地を訪れることでなされる観光実践。

※31 **後藤明生**
「内向の世代」に分類された作家。「関係」「笑い」「分裂」等をキーワードに、批評的な小説を執筆した。偶然に導かれて土地とテクストを往還しながら書かれた小説として、『吉野大夫』『首塚の上のアドバルーン』等がある。

Critique 1

スイスのシャーロック・ホームズ巡礼

イギリスの作家アーサー・コナン・ドイルの不滅のキャラクター、シャーロック・ホームズ巡礼の本場はスイスである。その理由を解説したい。

石橋正孝
Ishibashi Masataka

ライヘンバッハの滝、ケーブルカーを降りたところ

イギリスの作家アーサー・コナン・ドイル（Arthur Conan Doyle, 1859-1930）※1の名を知らない人はいても、彼が生み出した不滅のキャラクター、シャーロック・ホームズの名を聞いたことがない、という人はいないだろう。庇が前後に付いていて耳覆いを上部で結び合わせた帽子（ディアストーカー）、マントつきのコート（インバネスケープ）という独特の出立ち、そして、パイプに虫眼鏡という小道具は、名探偵の代名詞となったこの人物を指し示す記号として街中の広告等で頻繁に見かけられるとおり、今ではすっかりお馴染みのイメージとなっている。

原作の設定によれば、そんなホームズが活躍したのは、十九世紀末から二十世紀初頭、すなわちヴィクトリア朝後期からエドワード朝初期にかけてのイギリスだ。時代を現代に移したイギリスの連続ドラマ「シャーロック」の世界的なヒットに追随して、アメリカおよび日本においても同様の現代版が相次いで制作されたことで※2、このキャラクターは時代的な制約からも、地理的な制約からも完全に解き放たれた感があるとはいえ、それでもなお、シャーロキアンたち――熱心なホームズファンをこう呼ぶ――はもちろん、ホームズの名前くらいしか知らない人にとっても、ホームズといえばロンドンである。当然、ホームズ巡礼の本場も、イギリスかと思いきや……必ずしもそうとは限らない。

ロンドンは聖地か？

こう断言すれば、では、ロンドンのベイカー街二二一Bはどうなのだ、という声が方々から上がりそうだ。ホームズと彼の伝記作者たるワトスン医師が同居していた下宿の住所である。問題は、この伝説的な住居を筆頭に、イギリス国内の舞台は、実在のレストランやカフェ、ホテル、劇場、博物館、駅等々はともかく、その多くが完全には特定できないことにある。なるほど、あらゆるガイドブックでベイカー街は紹介されており、この通りの二二一番地Bにはホームズ博物館があるため、そこに足を運んだ観光客の多くは、こここそ聖地だと思ってしまうだろう。ところが、この番地は自称にすぎず、二二一番地に本来該当する箇所とは異なる。おまけに、現在ベイカー街となっている通りは、ホームズが活躍したとされる時代には、北からアッパーベイカー街、ヨークプレイス、そしてベイカー街に分かれており、ベイカー街そのものは八五番地までしかなかった。

つまり、現在二百番台となっている区画はかつてのアッパーベイカー街であり、「ベイカー街二二一B」は架空の住所だった。それで話が終わりにならないのは、シャーロキアンたちにとって、かくもありありと思い浮かべられるホームズが完全に実在していないとはどこか信じがたく、当時のベイカー街のどの建物に彼は住んでいたのか、議論百出となっているせいである。彼らは原作の細かい記述を拾い集めて同時代の文献と照合し、それなりに根拠のある仮説を組み立てる。ホームズの下宿跡に巡礼したければ、それらの諸説をある程度把握した上で自分なりの見解を抱いて現地に赴き、候補地をめぐって最もそれらしく思える場所を探り当てなければならない。

しかし、それらの建物に当時を偲ばせるよすがはほとんどない。その点で、ホームズ博物館の建物が十九世紀の下宿屋そのままであるのは強みともいえるのだが、われこそが二二一Bであるという博物館側の主張を支持するシャーロキアンはおそらく一人もいない。それどころか、この博物館の強引なやり方は、一九九〇年の開館時から商業主義的であるとして彼らの嫌悪を掻き立ててきた。最大の目玉、すなわち二階に再現されたホームズたちの居間にしても、観光客の目にはそれらしく映っても、シャーロキアンにはフェイクとしか思えない。同じ再現なら、チャリング＝クロス駅にほど近いパブ・シャーロック・ホームズ※3の二階にあるガラス張りの居間――かなり狭いのであるが――の方に彼らは軍配を上げることだろう。少なくともここは原作に登場するホテルの跡地なのだし、居間の方はコナン・ドイルの息子エイドリアン※4が関わった一九五一年のホームズ展で展示されたそれを引き継いでおり、由緒があるからだ。

シャーロキアンとホームズの実在化

アニメ聖地巡礼の場合とは異なり、基本的に言葉しか用いない文学作品における舞台描写には本質的な曖昧性が付き纏う。ましてやコナン・ドイルは、最小限の言葉で最大限の効果を発揮する技に長けていた作家である。

舞台の描写は簡潔極まりなく、犯行現場は同定できそうで同定できない程度に現実と関連づけられている。ホームズを実在化すべく舞台探訪を志すシャーロキアンたち――彼らの活動は「地理学」と呼ばれる――は、ホームズの推理方法を自ら実践し、多少なりとホームズにならざるをえない。

シャーロキアンとは、自身の最良の部分を素材として自らのうちにホームズを作り続けている人たちのことなのである。彼らはホームズに己の一部を捧げているといってもいいし、乗っ取られているといってもいい。無論のこと、そうして作り上げられるホームズはシャーロキアンごとに異なる。だが、より多くのシャーロキアンの支持を集めて彼らと共有できる部分が増えれば増えるほど、ホームズは実在化していく。

この時、ホームズの実在化を支える「基盤」として最も強力なのは、彼の人生にとって決定的に重要であり、かつその同定に関して全員の同意が得られる現実の場所にほかならない。そうした場所が少なくとも一つ、スイスには存在している。ライヘンバッハの滝である。韓国ドラマ「愛の不時着」の舞台としても有名になった観光地インターラーケンから鉄道で三十分ほどの距離にあるマイリンゲンまで行けば、この滝はすぐそこである。滝が下り落ちる山の中腹までケーブルカー※5が敷設されており、麓の駅には「THE REICHENBACH FALLS – FAMOUS SINCE 1891」と大書されたポスターが乗客を迎える。一八九一年は、ホームズ「最後の事件」がこの場所で起きたことになっている年だ。しかし、短編小説「最後の事件」が発表されたのは一八九三年の年末である以上、その二年前からここが「有名」になったはずがない。巡礼の入り口で早くも現実は虚構の侵食を受けている。

ホームズの死に場所

雑誌「ストランド・マガジン」の一八九一年七月号に「ボヘミアの醜聞」が発表されたことをきっかけに、すでに『緋色の研究』（一八八七年）および『四つの署名』（一八九〇年）の二長編に登場していたシャーロック・ホームズは爆発的な人気を獲得する。人々の熱狂におそれをなしたコナン・ドイルは、短編シリーズの二十四作目に当たる「最後の事件」でホームズを葬ることにした。殺す必要があると認めた時点ですでにホームズを実在化していたといえるが、本人によれば、一八九三年八月に講演旅行でスイスを訪れた際、ライヘンバッハの滝を実見し、ここ以外にホームズの死に場所はありえないと考えたのだという（『わが思い出と冒険』）。ホームズが背負っている読者の支持を押し返すには、現実の滝の力を借りる必要があったのである。

滝の水量が十分な夏にここを訪れれば、コナン・ドイルとともに、そしてあらゆるシャーロキアンとともにホームズの存在感を共有できる。二十世紀のオフィスが立ち並び、正確な建物が特定できないベイカー街の下宿より、時代の変化をあまり受けていない自然の滝の方が圧倒的に聖地としての「真正」性は高い。滝に向かって右側に当たるケーブルカーの終点はバルコニーになっており、向こう側の絶壁に星型のプレートが設置されているのが見える。ホームズが宿敵であるモリアーティ教授と死闘を繰り広げた現場だというのだが、そこから滝壺に落下するにはやや離れすぎているように思える。息を切らせながら急な山道を登り、滝の上に架けられた橋を渡って向こう側に回ると、左に弧を描きながら木立の下を下っていく山道があり、途中で滝のある左に折れる道は、手摺り等が一切なく、人ひとり擦れ違うのがやっとの細さ、ここまで足を運ぶ人も稀ときては、いかにも殺意を秘めた悪人に背後から追い詰められそうな雰囲気だ。さらに左に回り込んだ先に、滝が意外な間近さで目に入り、道自体は行き止まりになっている。さすがにここには柵が設けられ、二人の仇敵の戦いを記念するプレートがスイスのシャーロキアン団体の手で断崖に嵌め込まれている。ケーブルカー側の方が滝には近づけるのでコナン・ドイルが感じた迫力を追体験できる反面、このような「恰好の」行き止まりはない。

マイリンゲンのホームズ博物館

手塩にかけた犯罪組織を壊滅させられて復讐を誓うモリアーティ。彼の追跡を逃れてホームズとワトスンがここまでたどり着いたのは、一週間ほどローヌ渓谷を散策してからロイクで谷を逸れ、「まだ雪深いゲミ峠をこえ、インターラーケンを経て」※6 マイリンゲンに到着、そこで一泊した

1：ライヘンバッハのプレート　2：ケーブルカーの乗り口　3：滝へ向かう道

〈英国旅館（エングリッシャー・ホーフ）〉の主からローゼンラウイ行きと途中にある滝見物を勧められたからだった。マイリンゲンのパークホテル・ドゥ・ソヴァージュは、〈英国旅館〉の最有力候補であり、そのことを示すプレートが入り口脇に抜かりなく設置されている。そのすぐ横にある元教会の一階と地下墳墓を利用して、ホームズ博物館※7が一九九一年に開設されている。ここの目玉もベイカー街の居間で、スペースも十分に確保され、ロンドンの二つの再現よりそれらしく見える一方、雑然さがすっきりと演出されすぎている。当時のイギリスの警官やスイスの駅員の衣装や装備の影に隠れるように、ホームズだけではなく、ワトスンゆかりの品（陸軍軍医時代の写真や勲章、大学時代に所属したラグビーチームの関連品）が展示されており、狭い割には見応えがあるものの、展示の意図が一目で見えてこない憾みがある。折角の地の利を活かせず、「聖地」になりきれていないという印象は否めない。

マイリンゲンの街そのものにも見どころは少なく、滝への巡礼を定期的に繰り返した欧米のシャーロキアンたちもいささか飽きがきてしまったようで、二〇二三年六月に久しぶりに開催されたイベント※8は、ロイクとゲミ峠の間の保養地ロイカーバードのホテルが会場だった。五十名近い参加者のうち、非欧米人は日本人だけだったが、九人もいた。円安のせいもあってスイスの街中で日本人観光客の姿をほとんど見かけないことを思えば、驚異的な人数である。この時に知り合った主催者のマーカス・ガイサー氏がローザンヌ在住のヴァンサン・ドレー氏※9を紹介してくれた。ドレー氏は、リュサン※10にあるもう一つのホームズ博物館の学芸員なのだ。リュサンはごくありふれたスイスの小村なので博物館も土日しか開いていない。ドレー氏の計らいで彼の懇切な解説とともに博物館を回り、さらにエイドリアン・コナン・ドイルが所有していた中世の城の内部を特別に見学させてもらうことができた※11。

ベイカー街二二一Bのミニチュア

著作権継承者としてホームズを（それ以上にそこからあがる金銭的利益

1：リュサンのホームズ博物館、居間　2：リュサンのホームズ博物館、事件の記念品（まだらの紐）　3：リュサンのホームズ博物館、事件記念品　4：リュサンのホームズ博物館、ドールハウス

を）独占しようとしたエイドリアンは、シャーロキアンを敵視し、エラリー・クイーンの編纂によるパロディ傑作選『シャーロック・ホームズの災難』※12を発禁に追い込み、ミステリ作家ジョン・ディクソン・カーの協力を得て出来の悪い贋作集『シャーロック・ホームズの功績』※13を正統な続編として書いたため、そのイメージは芳しくない。すでに触れた一九五一年のホームズ展の展示品、そして元々は城に新たに再現されていた居間※14をエイドリアンから引き継いだこの博物館は、ドレー氏を中心とする熱心なシャーロキアンたちの濃やかな配慮があらゆる細部に行き渡っている。さして大きくはない縦長の一室の入って左手に、ホームズ展で使用された陳列ケースがそのまま壁際に沿って置かれ、ホームズ物語の誕生と進展を時系列順に追っていく。奥に隠された居間の手前には、コナン・ドイルが初期ホームズものをその上で書いた机と椅子の実物が無造作に据えられている。右側に移ると、初期シャーロキアンたちの著作が、次いで原作で物語られていた（あるいは触れられるだけで物語られなかった）数々の事件の記念品があれもこれも所狭しと並んでいる※15。コナン・ドイルの使っていたスキー板もある※16。ガラス越しにしか見られない居間にも入れてもらったが、住人たちがさきほど慌ただしく出ていったばかりとでもいった自然な乱雑さが全体を支配している。

隣室で展示されている記念品同様、すべてが黴臭く、古色を帯びていることが、ここではフェイク感よりもむしろ由緒を感じさせるとしても、それはエイドリアンのものだったという先入観の結果にすぎまい。この博物館を「完成」させた最後のピース、それは、フランスのシャーロキアン、イヴ＝シャルル・フェルコック※17が七年の歳月をかけて完成させ、二〇一五年以来、展示の掉尾を飾っているベイカー街二二一Bのミニチュアである。原寸大の居間には入りきらなかった事件関係品もすべてこのミニチュアには収められており、いわば魔法の杖の一振りによって博物館の虚構パート全体を若返らせた上で縮小させ、親密な空間の内部で一堂に会させ、覗き込めるようにしたかのようだ。原寸大であれば古物以上のフェイク感を醸したはずの新しい備品たちが想像の中でみるみる往時の姿を取り戻していく。エイドリアンという間接的な「由緒」とシャーロキアンのひたむきな「情熱」が出会い、原作者とも原作とも無関係なこの場所を、紛れもない「聖地」に変容させている。

天然のままの「聖地」と徹頭徹尾人為的に作り上げられた「聖地」。両者が揃っているスイスこそ、ホームズ巡礼の本場である所以を多少なりとご納得いただけただろうか。

※1 シャーロック・ホームズシリーズ以外に、歴史小説、科学小説、恐怖小説、心霊主義の解説書等、多くのジャンルにまたがる著作を残した。

※2 「シャーロック」は二〇一〇年から一七年にかけて四シーズン全十二話が制作され、ホームズをベネディクト・カンバーバッチ、ワトスンをマーティン・フリーマンが演じた。アメリカでは、二〇一二年から一九年にかけて七シーズン全百五十四話に及ぶ「エレメンタリー」が現代のニューヨークを舞台に制作され、ホームズをジョニー・リー・ミラー、ワトスンをルーシー・リューが演じた。日本では、二〇一八年にホームズを竹内結子、ワトスンを貫地谷しほりが演じた「ミス・シャーロック」全八話が、二〇一九年にホームズをディーン・フジオカ、ワトスンを岩田剛典が演じた「シャーロック アントールドストーリーズ」全十二話、二〇二二年に『バスカヴィル家の犬 シャーロック劇場版』が制作された。

※3 The Sherlock Holmes, 10 Northumberland St, London WC2N 5DB, England.

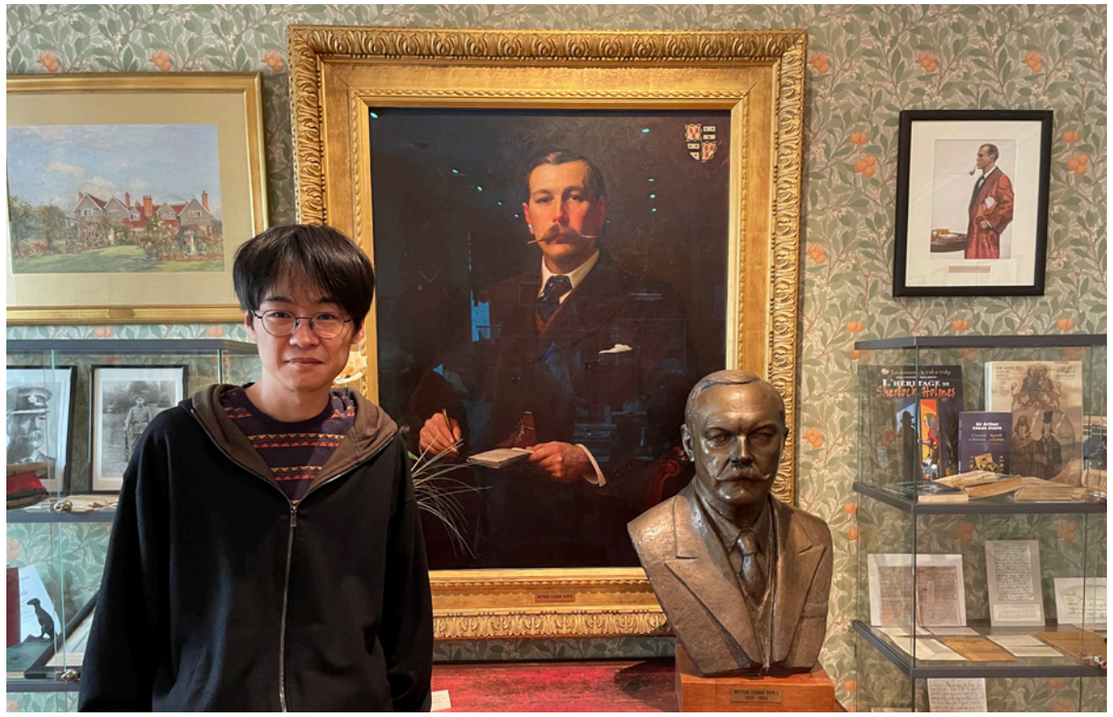
※4 Adrian Conan Doyle, 1910-1970. アーサー・コナン・ドイルの三男。一九六五年にコナン・ドイル基金を創設した。

※5 一八九一年には存在せず、一八九九年に開設された。後出のマーカス・ガイサー氏によれば、これ以前に滝を訪れた人たちは、ケーブルカーとは反対側にある道を徒歩で登っていた。

※6 光文社文庫版『シャーロック・ホームズの回想』（日暮雅通訳）による。

※7 Sherlock Holmes Museun Meiringen, Bahnhofstrasse 26, 3860 Meiringen.

※8 スイスのライヘンバッハ・イレギュラーズが主催し、Musings on the amusements in the Canonというタイトルの下、六月一日から四日までホテル・ル・ブリストルで開催された。ゲミ峠への遠足を挟んで九人のシャー



コナン・ドイルの机と筆者

ロキアンが発表を行った。

※9 Vincent Delay, 1971-. スイス・ロマンド・ホームズ研究会の創始者・会長。名探偵Toby Sterlingを主人公とするシリーズをこれまで十作発表しているアマチュア作家でもあり、第七作目の*Fatal pèlerinage*, 2016では、スイスのホームズ巡礼参加者の一行がローゼンラウイホテルで殺人事件に巻き込まれる顛末を描いている。

※10 Lucens. ヴォー州にあり、ジュネーヴから電車で二時間ほど。フランス語圏に属し、ホームズ博物館の解説もすべてフランス語で書かれている。

※11 十三世紀に建設された要塞部分と十六世紀に建てられた住居部分からなり、ともにかなり原型をとどめている。エイドリアンはこの城を一九六五年に購入した。ホームズ博物館は当初、この城に開設され、一九八五年まで公開されていたが、その後、非公開となり、二〇〇一年に近くのメゾン・ルージュに場所を変えて再公開されるに至った。

※12 Ellery Queen (ed.), *The Misadventures of Sherlock Holmes*, Little, Brown and Company, Boston, 1944. 邦訳は『シャーロック・ホームズの災難』(ハヤカワ文庫、上、一九八四年、下、一九八五年)。

※13 Adrian Conan Doyle and John Dickson Carr, *The Exploits of Sherlock Holmes*, John Murray, London, 1954. 邦訳は大久保康雄訳『シャーロック・ホームズの功績』(世界探偵小説全集、早川書房、一九五八年。のち、ハヤカワ・ポケット・ミステリ、一九八〇年)。

※14 以下のインタビュー動画において、城にあった居間を解説するエイドリアンの姿を見ることができる。(最終閲覧二〇二四年一月三十一日)
https://www.youtube.com/watch?v=THtleV3sfg

※15 高橋登志子「フランス・スイス旅行記〜Invitation au voyage〜」(「ホームズの世界」第二十五号、日本シャーロック・ホームズ・クラブ、二〇〇二年)には、再オープン直後の二〇〇一年七月における展示内容が紹介されている。その時にはなかったという「スマトラの大ネズミの剥製」は、ドレー氏によれば、「スマトラの大ネズミの小ネズミの剥製」の展示が九月の落成式に間に合った。また、ドレー氏の個人コレクションに含まれていた「塩漬けになった耳」は現在、博物館に収められている。依然として「悪魔の足」がコレクションには欠けているが、近い将来における入手を期しているとのことである。

※16 スイス冬季の観光客向けのスキーを始めたのはコナン・ドイルとされる。

※17 Jean-Yves Fercoq, 1944-2018. イラストレーターとしてアメリカで活躍し、アニメ「スクービー・ドゥー」の制作に関わる。

トラベルライティングの取り組み

本学部で行われている観光文学の講義を通じ、トラベルライティングの活性化や地域連携への活動内容について報告を行い、今後の展望と取り組み方を考える。

抜井ゆかり Nukui Yukari
舛谷鋭 Masutani Satoshi

新型コロナウイルスがトラベルライティングに与えた影響

現在は日常生活を取り戻しているが、新型コロナウイルス蔓延により海外においてロックダウンが行われ、移動の機会を奪われたことにより、トラベルライティングにおいて新たな機運が生まれたことに着目してみたい。Gary F. Fisher & David Robinsonは二〇二一年に発表した「Travel Writing in an Age of Global Quarantine」の中で、「空間と場所に対する私たちの個人的な記憶と理解は、歴史的な先人たちの影響を受けている。現在の強制的な停滞は、このプロセスを探求するまたとない機会を提供してくれる」、また「現在の世界的なパンデミックは悲劇的で困難なものだが、この特殊な状況下において創造的に捉える前向きな機会である」と述べている。この本では、移動できないときこそトラベルライターたちが過去の旅行記を用い、自分が過去に行った旅と照らし合わせて新しいテーマ設定などを模索することができるとし、それらの試みがトラベルライティングの魅力をより高めようとする近年の動きに繋がっている。

「Travel Writing in an Age of Global Quarantine」

本学部におけるトラベルライティング

トラベルライティングとは、旅のテキストを表し、狭義には一人称の自伝、回想の一部として旅行ガイドブックは含めないが、広義にはガイドブックばかりでなく、旅の行程、旅テーマのフィクション、回想録、場所の記述、自然の描写、行跡地図、旅テーマのフィルムなどを含む(窪田憲子ら編著:二〇一六)。海外においては一般的な語句で、書店にもひとつのジャンルとして棚が設けられていることが多いが、翻って日本ではトラベルライティングという語句はなじみのあるものでなく、旅行記や紀行文といった語句がよく使われている。そのため、大学などの教育現場でもトラベルライティングという語句を冠した講座は少なく、「紀行」や「紀行文」という語句を用い講義を行っている大学が多い。観光専門の学部を持つ本学では、紀行文学に関わる講座が複数設けられており、「トラベルライティング」を二〇一四年に開講してから、旅の経験を執筆しアウトプットすることを特に重視してきた。それは、実際に身体の移動を伴う一次的な旅の後にトラベルライティングを実践することで、自らの過去の経験や感情に照らし合わせ、旅を深く思索する二次的な内面世界への旅=インナートリップを促すことにつながると考えるからである。旅の中で五感を用いて感じたことや想起した感情、出逢った人々の発した言葉などを改めて思い起こし、それらを文字として表す術を教えることにより、単に旅の記録をまとめたものを超え、自らの内面を表出する作品に仕上げるよう導いている。

トラベルライティングアワード 学生奨励賞

話は前後するが、二〇一四年に開講した科目「トラベルライティング」において優れた作品が多数提出されたことから、他の学生の刺激にもなり、より多くの人に読んでもらえればという想いから、プロの書いたトラベルライティングを対象とし舛谷ゼミが行っていた「トラベルライティングアワード」に、学生奨励賞設置の提案をした。それが実り、二〇一六年から「トラベルライティングアワード学生奨励賞」が設けられ、学生は千六百字程度の旅のテキストを執筆している。毎年二百八十から四百を超えるそれらの作品をまず抜井が選考し、二十作品前後のロングリストまで絞った後、書き手の名を伏せ、舛谷ゼミの学生がさらに十作品前後のショートリストにし、本学のトラベルライティングに精通する教員に加え、プロのトラベルライターや旅の図書館関係者、旅関連出版社の関係者など専門家を集めた選考委員会を経て、最優秀賞、優秀賞を決定し表彰している。特に選考基準に筆者ならではのメッセージが読者に伝わる文章になっているかという点が掲げられ、オリジナリティー溢れる作品が集まり、表彰式では選考委員から貴重な講評も寄せられ、賞の授与だけに留まらない有意義な場となっている。表彰式では新聞社の取材なども受けることから、この受賞を就職活動に活かし、希望の会社への就職を勝ち取ったという学生の報告も受けている。

トラベルライティングアワード 新座賞への発展

さらにトラベルライティングを地域との関わりの中で活かせないだろうかと模索し、本学部が所在する新座市へ「トラベルライティングアワード新座賞」の提案を行ったところ、これが二〇一七年に実現した。テーマは「私の好きな新座」とし、学生個々が新座市の魅力的なスポットや、独自に探し出した新座市の薦めたい場所について執筆している。こちらも講義で提出された作品を対象とし、選考委員会のメンバーに、新座市長、新座市教育委員長、新座市産業観光協会長などが加わり、二〇一八年からは新座市産業観光協会主催となった。さらに二〇一九年から立教大学に加え、新座市内の跡見学園女子大学と十文字学園女子大学を含めた三大学の学生の作品を対象とする賞に発展した。現在では運営を三大学の学生が順番に行い、市役所で行われる表彰式までの活動を担当し、大学間の交流も活発に行われている。新座賞は、学生が新座を地元として捉え、その魅力を探り、探し歩くきっかけともなる。また選出された作品は、新座市のホームページなどにも掲出されるが、公表されることで若者目線から新座市の魅力をアピールすることができ、地域連携として理にかなった活動となっている。

トラベルライティングの効用

これらトラベルライティングを軸として様々な取り組みを行うなかで、改めて気づかされたことがある。

第一に、学生奨励賞のテーマ「自分を変化させた旅」で、修学旅行や平和学習を挙げてくる学生が非常に多いということだ。本学部の学生は、コロナ関連の数年間は例外としても、他学部の学生に比べ旅行経験が多いのが特徴である。海外旅行経験も豊富な学生が多いなか、わざわざこのテーマで、修学旅行や平和学習を選んで提出してくることに学生たちへのインパクトの強さが際立っているのが見て取れる。なかでも、作品を読んで影響の大きさを考えさせられたのが、沖縄の「ガマ」で行われる入壕体験である。「ガマ」とは、第二次世界大戦時、沖縄戦の最中に日本人の本部壕や陣地として使用された壕で、周辺の住民もそこに避難していた。こうしたガマに修学旅行で実際に入り、当時の様子を聞き、暗闇体験をし、黙祷を捧げるのがここでの平和学習である。当時の空間に実際に身を置くことができるのが、戦地や被災地を有する日本のダークツーリズムの、教育旅行としての利点の一つである。これらについて書かれた作品を読むと、こうした体験によって当時の様子を疑似体験することで、往時に思いを馳せ、そこに避難した人々の感情に自分の心情を寄せ、学生たちが「身につまされる」からこそ、戦争を自分ごととして捉えられるようになる。またそうした体験から紡ぎ出される文章は臨場感があり、読む者を引き込む筆力が宿っている。

第二に、新座賞によるトラベルライティングの効果についてである。近年自治体は、住民だけでなくその土地へ通う労働者や学生など、いわゆる「関係人口」に目を向け、それらの人々にいかにして土地に対する親しみを持ってもらうかという「愛着の醸成」に取り組んでいるところが多い。実際に、抜井が毎年授業で行っているアンケート結果を見てみると、大学のある新座市に何年も通っているにもかかわらず、家というポイントと学校というポイントの往復だけで、新座賞の取り組み以前は新座市の他の場所へ関心を持っていた学生は少なかった。ところが、このレポート執筆に先駆けて行われる、新座市シティプロモーション課職員をゲストスピーカーとする「新座市の観光の取り組み」の講義を受講し、「わたしの好きな新座」をテーマとした作品を執筆することを機に、新座市に関心を持ち、改めて市内の名所等を訪れ、新座市を身近に捉えることにより、何らかの役に立ちたいと考える学生が増える傾向にある。これらのことからも、自治体が欲している関係人口の「愛着の醸成」にトラベルライティングが寄与できる可能性がうかがえる。また、大学が位置する新座市の観光を見つめ直す作業は、「マイクロツーリズム」という新型コロナ禍で着目されるようになった、移動が短距離の身近な観光を改めて体験することにも役立っている。

第三に、新型コロナ禍の中で提出された作品で、感情を表出することの大切さについて改めて考えされられた。遠出もできない、人との接触も図れず、パソコン画面を眺めてリモート講義を受ける日々のなか、孤独な感情が表された作品が多く見られた。トラベルライティングはある意味、日常空間と非日常空間の差異を表すものでもあり、文面に筆者の日常生活が色濃く滲み出てくることがある。大学生ともなれば、負の感情表現を発露できる場は限られるが、文字に表すことは自分の内面を改めて見つめ直し、それらを形として表すことでもある。レポートだらけの大学生活の中で、精神的な部分を表出できる、外に向かってそれらの感情を少しでも押し出すことのできるアウトプットの場として、トラベルライティングが少しでも寄与できるのではないかと、考えさせられる機会ともなった。

今後のトラベルライティングへの期待

トラベルライティングは冒頭に書いたように、海外では一般的で新たな動きも出ているが、残念ながら日本においてはまだまだ知られていない。本学部においてトラベルライティングの講義を十年間担当し、トラベルライティングアワードの活動も行ってきたが、知名度アップにはつながっていない現状がある。但し、前述「トラベルライティングの効用」に記したように、それらの中にいくつかの可能性を見出しているのも事実である。観光庁は高校などの高等教育に観光学を取り入れる方策を検討しているようだが、今後は日本に根付いている独特の修学旅行という文化にトラベルライティングを活用する術を取り入れることも一案ではないだろうか。また新座市と確立してきた手法を他地域にも拡大するなど、日本におけるトラベルライティングの裾野を広げる活動をより発展させていきたいと考えている。

2023年3月「トラベルライティングアワード新座賞」授賞式
新座市提供

トラベルライティングアワード新座賞ウェブサイト
(https://www.niiza.net/twa)

参考文献

Gary F. Fisher & David Robinson(二〇二二):Travel Writing in an Age of Global Quarantine ANTHEM PRESS

窪田憲子ら編著(二〇一六):旅にとり憑かれたイギリス人—トラヴェルライティングを読む ミネルヴァ書房

舛谷鋭(二〇一九):観光を学ぶということ 観光文化 公益社団法人日本交通公社

Column

旅から始まった

渡辺憲司

Watanabe Kenji

立教大学で教えていた頃、江戸時代の日本文学を学びたいという外国人留学生（ほとんどが大学院生）を何人か受け入れた。

私は最初の面接で、

「日本で勉強したいことはどんなことですか」と必ず聞く。

例えば学生が「上田秋成の雨月物語について学びたいと思っています」と答えたとする。私の答えは決まっている。

「では、上田秋成の墓に詣でなさい。そしてその作品が描かれている場所に行って来なさい。レポートは一万字以内。印象に残った写真を添付しなさい。その後でもう一度面接をしましょう」

上田秋成を研究したいというその時の学生のレポートは、私の想像をはるかに越えた素晴らしいものだった。ロシアから来たその学生は、後に同志社大学の教員になった。立教へ赴任した時の最初の留学生だからもう四十年近く前になる。

作品が出来た風土を肌で感じる

「長久保赤水について学びたいんですが……」と面接で突然言われた時は、戸惑った。今では、ウェブですぐに赤水の事を調べることが出来るが、三十年以上前にその手立てはなかった。国家機密としてほとんどおおやけになっていなかった伊能忠敬図に対して、長久保赤水の地図『改正日本輿地路程全図』は、版本として流布した。江戸の旅人の多くは赤水の地図を携えたのだ。そのことも知らなかった。ふる里が茨城県の高萩であることも知らなかった。面接は中断せざるを得なかった。冷や汗をかきながら、翌日から三日ほど国会図書館に通ったのを覚えている。その時国会図書館に通ったおかげで、『長崎行役日記』、『安南漂流記』をじっくり読むことが出来た。この時の読書の成果が、江戸時代初期に禁止されたとする遊女歌舞伎の定説が、江戸・上方の中心地域のみに対応する禁令であり、地方の遊女歌舞伎には対応していなかったという論文にまとめる契機になった。まさに瓢箪から駒であった。

現在、高萩には、長久保赤水の記念館が出来、駅前には彼の銅像もたった。今、彼女は、コロラド大学の教員である。

いささか乱暴な指導方針だったと思う。もっと丁寧な言い方もあったと思うが、学ぶことは、孫引きであってはならない。その作品が出来た風土を肌で感じることから始まるのだという考えは今も変わりがない。

五年位前に自由学園の学部での指導でも同じようなことがあった。宮沢賢治の研究をし

イラストレーション＝赤井稚佳

立教大学観光学部舛谷ゼミでは「トラベルライティングアワード2023」として、『翼の王国』二〇二三年一二月号掲載「ドイツ テディベアをハグ、一年中がクリスマスの街」（文＝服部 広子）を選出しました。

▶**翼の王国** 12月号 ドイツ「テディベアをハグ、一年中がクリスマスの街」

▲**空の足跡** 7月号 奄美「奄美世界自然遺産物語。」

▲**ひととき** 8月号 八幡浜「松村正恒の小学校」

▲**翼の王国** 1月号 富士山「Mt.FUJI×Five Senses」

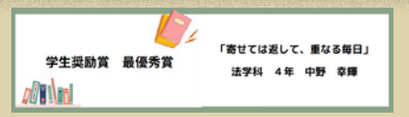
▲**トランヴェール** 8月号 長野「長野の名城を生んだフォッサマグナ」

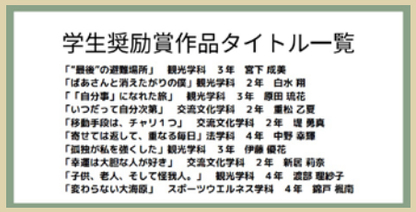
▲**トランヴェール** 12月号 北陸「北陸に根づいた前田が開く文化の華」

▲**SKYWARD** 11月号 ハワイ「Surf's UP in Oahu HAWAII」

学生奨励賞

2023年12月11日
「トラベルライティングアワード」
授賞式





学生奨励賞作品タイトル一覧

「"最後"の避難場所」　観光学科　3年　宮下 成美
「ばあさんと消えたがりの僕」観光学科　2年　白水 翔
「「自分事」になれた旅」　観光学科　3年　原田 琉花
「いつだって自分次第」　交流文化学科　2年　重松 乙夏
「移動手段は、チャリ１つ」　交流文化学科　2年　堤 勇真
「寄せては返して、重なる毎日」法学科　4年　中野 幸輝
「孤独が私を強くした」観光学科　3年　伊藤 優花
「幸運は大胆な人が好き」　交流文化学科　2年　新居 莉奈
「子供、老人、そして怪我人。」　観光学科　4年　濃部 聖紗子
「変わらない大海原」　スポーツウエルネス学科　4年　鏡戸 祝南

◀**SKYWARD** 12月号 宇宙「宙からの招待状」

たいという学生だった。彼女は、岩手の賢治の故郷にまだ行っていない、夏休みに行くつもりだという。私は、即刻行くようにと強く云った。明日にでも夜行バスに乗ったらどうだ。寮の当番などはどうにかなるはずだと滅茶苦茶なことを云った。彼女はその週末に夜行バスに乗って、岩手に行き、帰って私を訪ねて来た。私は優しく聞いた。

「小岩井農場で蝶を見たか、イギリス海岸は……どうだった」と。

「暴風雨でずっと記念館の中にいました。おかげで学芸員の方と親しく話をしました」

彼女の卒業論文を見たが、この時の経験は何も触れていない。しかし、実に読み応えのある論文だった。彼女は今母校の教師をしている。

研究の始まりには旅があった

自分にとっても研究の始まりには常に旅があった。

定時制高校の教員だった時、一月ほど平戸の山鹿素行の文庫で調査をした。漢籍の調査にはすぐ飽きたが、松浦史料博物館の枕絵や黄表紙などの多様さには目を奪われた。桑名での松平家の調査も一月ほど滞在した。伊勢の神宮皇学館の図書館へ出入りしたのもその頃だ。漠然とした調査で具体的なものはなかったが、知らない図書館でぶらぶらする楽しさを味わった。

情報をピンポイントで得ることは研究の王道とはいえない。どれだけ直接的には無駄と思われることに関心を示すことが学ぶということだ。それは多分人文科学系の学問探求の重要な姿勢だ。

特別にうまいものを食べることを目的とするのは旅と呼べない。

定時制から全日制の私立高校に転じ、給料は上がったが長い旅にはほとんど出ることが出来なかった。それでも研究日は、江戸の切絵図に従って歩き回った。切絵図にはさんだメモは宝物になった。

居心地のいいその高校から下関の女子短大へ転ずる決意をしたのは、〈旅〉の中だったような気がする。申し訳ないと思っているが、家族は旅の道連れだった。大名周辺の文芸活動を主題とした博士論文を仕上げるためには、地方に研究フィールドを持つことは必須だった。下関に八年在住した。家も建て墓も海峡の見える所に決めていた。旅の起点として申し分ないような気がした。日曜日と休みは、近辺の図書館を回っては、和書の調査をした。山口市の文書館はもとより県内の市立図書館はすべて回った。大きな神社の連歌資料もあらかた調査し、大分・宮崎の城下町の図書館は総なめに歩いた。対馬・壱岐・五島の図書館も、短大の生徒募集の出張を利用して見尽くした。対馬宗家の和書目録を作ることになったのもこの時の経験が生んだものだ。

昼間、図書館で残存する和書を調査し目録を取ることは苦痛ではなかったが、大名周辺文芸の高踏的雅な意識は、あまり性に合わなかった。旧大名家の茶会にも何度か参加したが、茶も菓子もうまくなかった。居酒屋の冷やで乾きものを齧る方がうまかった。

旅を共にする学友にも恵まれた。四人でいつもチームを組み、調査の後、夜は決まって麻雀をやった。その仲間は、新潟やアメリカの古典籍の調査にまで続いた。

その頃、『下関市史』で下関の遊郭稲荷町の歴史を執筆担当することになり、聞き取り調査の面白さにはまり、新たな旅回りをすることになった。地方遊里を巡る旅である。

大げさな言い方かもしれないが、何か物に憑かれたように沖縄から北海道まで各地の遊女の墓を訪ねた。碑文を見、拓本を取ることの面白さは、同時に私を漂泊に誘った。旧売春街はほとんど廃墟であった。夕方店先を掃く老婆に話しかけ、かっての賑わいを聞く。それに私は酔ったのである。酔後談といってもいいのが、講談社から出した現代新書『江戸遊里盛衰記』である。

『江戸遊里盛衰記』
（講談社現代新書）
1994年

黙々と海を見るだけの旅

昭和が終わる年に私は母校の大学に転じた。家族の都合もあり、三年間単身赴任であった。東京から下関までの寄り道の旅が続いた。宿など決めたことはなかった。宿がなければどちらかの家に夜行バスで帰ればよかったのだ。

単身赴任が終わり、東京での安定した生活は、私から放浪癖を奪った。靴箱いっぱいに語彙カードを取り、それと首っ引きで、岩波書店の新日本古典文学大系「仮名草子」の注釈に没頭したが、面白くなかった。批判ばかりが気になった。アメリカ・フランス・ドイツ・中国など科学研究費を利用して何度も旅をした。数年間チームを組みワシントンの議会図

『いのりの海へ』
（婦人之友社）
2018年

書館（L・C）の日本古典籍の目録作成も行った。しかしそれは私が求める自由な旅とは遠いものだった。

立教での生活を終わろうとした頃、脳腫瘍が見つかって入院した。病室から東京タワーを見ながら元気になったら、旅で浮遊しようと思った。退院直後、紀行文連載の話が、出版社の教え子からもたらされた。渡りに船だった。季刊誌の連載で私は息を吹き返した。「たまさか紀行」などと題したが、編集者の案内とカメラマン付きの贅沢な旅だった。私の思っていた旅とはちょっと違うなと思ったが、締め切りに間に合わせなければならない記事に楽しく鍛えられ五年ほど続いた。記事は後に一冊にまとめられ、『いのりの海へ』（婦人之友社）と改題して刊行され、紀行文学賞の最終審査の二人に残ったが、あえなく落選した。

大学教員を終えようとした時、又高校の教員へ転ずることになった。東日本大震災の前年が赴任であった。

震災は、私の旅への思いを変えた。年老いたこともある。私は旅の中で忘れてはならないものを自分に残そうと思った。二〇一一年から、今日まで、コロナの時期をのぞけば福島への旅は毎年続いている。ほとんど一人で出かけた。復興に役立つようなボランティア活動でもない。ビジネスホテルの一室で缶ビールを飲みひたすら波の音を聞く。

震災後の翌年であったか。講堂でのあいさつの折に、「今週末、朝七時発いわき行きの電車に乗ろう。常磐線の上野駅ホームに希望者は来い。私が立っているから福島へ旅をしよう」と生徒に声をかけたこともある。集まったのは五人だった。旅の最中、私は何も云わない。一緒に黙々と海を見るだけの旅だ。

七十五歳で教員生活を離れた。すぐに取り掛かったのは、江戸の切絵図にはさんだメモの集成だ。江戸の岡場所をまとめておきたいと思った。遊里史を吉原中心に扱ったことへの反省もあった。何より江戸をもっと歩き回りたいと思ったのだ。ヤクルトの応援にうつつを抜かしている間に、仕上がりも一年遅れた。昨年刊行した『江戸の岡場所－非合法〈隠売女の世界〉』（星海社新書）だ。

『江戸の岡場所－非合法〈隠売女〉の世界』
（星海社新書）
2023年

止むことはない漂泊への思い

今年、又ボツ原稿がたまった。

徳富蘆花の「みみずのたはこと」を読み、衝動的に関寛斎のことを知りたくなったのだ。千葉東金で生まれ、蘭方医として官軍の従軍医となり、徳島で町医として活躍後、一念発起、七十二歳で北海道陸別で開拓を志し、八十三歳で自死した寛斎の跡を追って旅した記録だ。医学史関連の雑誌に投稿したのだが返って来たのだ。

旅先のホテルで夢中で書いたのがいけなかった。写真もピンボケだ。もっとじっくり調査してから、旅するべきだったかもしれない。

今なら、ロシアの留学生にも、宮沢賢治を卒論に選んだ学生にもパワハラもどきの指導はしないかもしれない。秋成をじっくり読め、賢治の作品の読破をまず第一にすすめるかもしれない。

ボツ原稿を前にして弱気になったのだろう。七十九歳。齢のせいかもしれない。しかし、まだ漂泊への思いは止むことはない。読書は飯の糞のようなものだと云ったのは、永井荷風だったように思う。旅も又飯の糞のようなものかもしれない。何が栄養になったか、何が思い出になったかわからない。しかし、〈旅〉がなければ、私の研究はなかった。学問もなかった。旅に出てそれを書き残すことが出来ればボツはおそれない。旅に病んで夢は枯野をかけめぐる……そんな思いになるのが近いようだ。精読する前にあとがきを読んで旅する。これは性分であろう。

夏が過ぎた頃から、かって見捨てた大名研究と遊女との接点を、京六条遊郭の吉野太夫を中心に描きだすつもりで書き下ろしている。広告（ミネルヴァ書房 日本評伝選）は既に出た。逃げるわけにはいかない。『江戸の岡場所』では下級遊女夜鷹を扱うことが大きな目的の一つだった。今度は、天皇家の周辺や富豪の町衆との交遊で知られた高級遊女の話である。書きながら〈旅〉として京都の町を歩き回らねばなるまい。来季、ヤクルトが勝てば夜を奪われ締め切りに間に合わなくなる。それを祈って沖縄キャンプに行こうかどうか迷っている……。

Critique 2

舞台探訪の成否を分けるものは何か
――宮沢賢治『なめとこ山の熊』の場合――

椋棒哲也
Mukaibou Tetsuya

二〇二三年八月、宮沢賢治『なめとこ山の熊』舞台探訪のために花巻を訪れた。その成功と失敗について考えを述べたい。

はじめに

舞台探訪※1が、どうしようもなく失敗することは考えづらい。作品の舞台を訪ね歩くとき、僕らは当の作品に思いを馳せて、全身でその世界に浸ろうとするだろう。そのような体験ができただけでも、これを成功と呼べるからだ。しかし何事につけ例外はあるもので、例えばこんにち、梶井基次郎「檸檬」（『青空』一九二五・一）の舞台探訪は、その成否の判断が難しい。

果物屋で一顆の檸檬を買い、それを書店で積みあげた本の上へ置き去りにする、という物語だ。高等学校・現代文の教科書で親しむ人も多かろう。その果物屋のモデル（八百卯）は閉店して久しい。書店（丸善）は遠い昔に移転した。しかし物語の末尾、「私」が〈活動写真の看板画が街を彩る京極を下る〉場面については、新京極商店街でＭＯＶＩＸ京都の前を歩くとき、わずかながら追体験できる。これを、舞台が無くなることで探訪が困難になる例とすれば、逆に舞台が現れることで探訪が可能になる場合もある。宮沢賢治『なめとこ山の熊』（一九二七年以降執筆・生前未発表）※2を採り上げたい。

作品について

宮沢賢治『なめとこ山の熊』の粗筋は、以下のようにまとめることができる。

①熊を捕ることを仕事とする猟師・淵沢小十郎は、熊のことばが分かるようで、母子熊の会話を聞く。②山では主のような小十郎も、町へ熊の皮と胆を売りに行くと、荒物屋に熊の毛皮をひどく安く買われる。熊は小十郎にやられ、小十郎は荒物屋にやられ、しかし荒物屋は町に〈ゐるから熊に食はれない〉。③ある夏おかしなことに、熊が小十郎に自分を殺す理由を問い、二年待てと言い、間違いなく二年目に垣根の下で血を吐いて死んでいた。④家を出て山へ入った小十郎を⑤熊が雪の中で殺し、三日目の夜に山の上で「黒い大きなものが」小十郎の死骸にひれ伏していた。――なお作者の生前に発表されていない、草稿に基づく作品である※3からか、一人称「私」に少し「僕」が混じる、常体に敬体が混じるなど、不統一が見られる。本作が教材として採り上げられる※4ときも、このような不統一は訂正されず、むしろ教員は混交の理由を生徒に考えさせる方向へと導くことができる。

さて本作は劈頭、「なめとこ山の熊のことならおもしろい」と宣言するのだが、のち長々となめとこ山内部の説明が連なり、ようやく熊が現れたと思えば、すぐに淵沢小十郎へ

ナメトコ山（標高860m）
「ナメトコ山」＊図録掲載写真

宮沢賢治記念館図録『特別展 童話 なめとこ山の熊』（令3・2）表紙イラスト 資料提供：宮沢賢治©時記念館
イラストレーション＝somero visterio

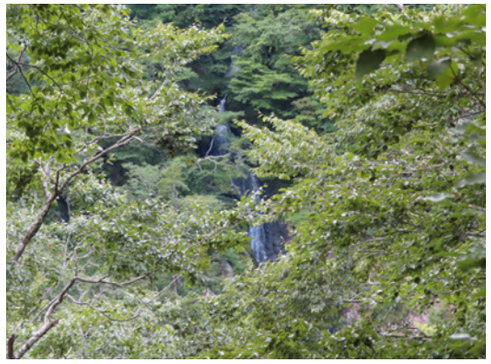
話頭が向かうなど、いわば文章のうえで遊歩が試みられる。また早々に、語り手がこう打ち明ける。

ほんたうはなめとこ山も熊の胆も私は自分で見たのではない。人から聞いたり考へたりしたことばかりだ。間ちがってゐるかも知れないけれども私はさう思ふのだ。〔略〕鉛の湯の入口になめとこ山の熊の胆ありといふ昔からの看板もかかってゐる。

本作が伝聞であり想像であり不確かであることを、臆面もなくさらけ出す、このような語り手について、先行研究※5は当然ながら注意を向けてきた。例えば、小埜裕二「偽の因果、真の因果――「なめとこ山の熊」論――」（『国語国文』一九九六・一二）は、語り手は自身にとっての「現在のなめとこ山を知っている存在であり、小十郎の死を知ったうえで語り始めている」と述べる。また丸山義昭「『なめとこ山の熊』を教室でどう読むか」（『日本文学』二〇二〇・三）は、語り手の「私」は、「町の人間であり、まさに貨幣経済のなかで暮らしている（その恩恵を受けている）人間にほかならないだろう」と述べる。

もし現実の語り手を仮構することが、作品解釈に役立つのだとすれば、

「なめとこ山」案内板 ＊CanonSX740HS使用にて撮影


大空の滝 ＊CanonSX740HS使用にて望遠

自然豊かな地域。ここに花巻温泉があり、さらに銀河なめとこライン（県道一二号）を辿れば、岩手県交通のバスで鉛温泉等の温泉群へ足を伸ばすことができる。豊沢ダムを越えれば、なめとこ山・大空滝・中山峠まで、文学遺跡が多い印象を受けた。

そして町の人間で現代人である僕らの感覚を、作品世界へと持ち込むことが許される※6のであれば、舞台探訪を介して、本作『なめとこ山の熊』に接近することを試みても良いのではないだろうか。

舞台探訪やってみた

二〇二三年八月上旬、僕は『なめとこ山の熊』舞台探訪のために花巻を訪れた。まず花巻という土地について簡単に述べる。とはいえ市政に関わる統計情報を羅列することが趣意ではないから、旅行者が見聞した大まかな地勢だけを述べる。

花巻市を三つの土地に分けることができると考える。第一に花巻駅や東北本線を中心に据えた歴史ある市街。第二に新幹線新花巻駅を擁して、宮沢賢治童話村・宮沢賢治記念館・宮沢賢治イーハトーブ館を備えた観光に強い区域。第三に市街の西部に広がる地誌に発見した「那米床山」という記述に国土地理院が対応し、一九九六年八月一日発行の地形図にその名称が記載された※7からだ。今は、豊沢川と県道一二号線の交点にある幕舘（まくだて）橋に、「賢治童話の舞台「なめとこ山」」と記された案内板が立つ。透明の案内板で、背景の山々と重ね合わせることで、なめとこ山を同定させる仕組みである。案内板に「登山道は整備されていませんので登ることはできません」とあるものの、山の標高は八六〇メートル。登山者向けのサイト「ＹＡＭＡＰ」（https://yamap.com/）で検索を行えば、幾つかの登山情報を得ることもできる（二〇二三・一一・一三閲覧）。しかし当年はいささか事情が異なる。熊が頻繁に人里へ現れているのだ。

「2021年4月11日／ツキノワグマ」花巻市笹間（山口山）
＊市街から10kmほど＊花巻市観光課提供／同自然保護管理委員撮影

2023年「7月20日　ツキノワグマ（桂沢）」＊花巻市観光課提供／同自然保護管理委員撮影

二〇二三年一一月八日現在の「ツキノワグマ出没状況図」（岩手県ＨＰのうち「ツキノワグマによる人身被害状況・出没状況について」頁掲示）を参照すると、花巻市における熊の出没数は三〇〇件以上だ。なお表「ツキノワグマによる人身被害の状況」によると、岩手県において過去六年間一二件以上二七件以下を推移していたそれが、同日現在ですでに四三件を数えるという。八月上旬にこの状況を予想していたわけではないが、念のために花巻市観光課をお訪ねしたところ、「7月2日／クマ糞（鉛）」「7月20日／ツキノワグマ（桂沢）」という説明文の付いた写真をお見せ頂いた。自然保護管理委員の方が撮影されたものという。さらにガイドもなく単独で、草藪をこぐこと、沢を渡ることなど、とうてい無理であると判断し、登山を断念した。一方で大空滝までは道があることを確認できたから、これに望みを繋ぐことにした。

大空滝上り口の「大空滝展望地まで約3・4km　徒歩約1時間20分」という表示を頼りに、熊鈴を鳴らしながら登り、着いた先で見たものは、しかし「大空の滝／ご苦労さまでした／野外活動センター」という案内板の先にはるか臨む、木々に隠れがちの、ごく細い水の流れである。それは本当に、手の届かない遠くの場所にある、呆気にとられるほど小さな水の流れである。――この舞台探訪こそが、どうしようもない失敗というものだろうか。最後に、もう一度舞台探訪の成否について考えを述べ、稿を終えたい。

おわりに

そもそもこの舞台探訪の目的は、どのように設定されていたか。それは「なめとこ山の熊」の語り手を町の人間であると仮定して、その人物の目線に現代人のそれを同期させること、ひいて作品解釈へと役立てることだ。まず荒物屋と語り手は、町に〈ゐるから熊に食はれない〉。またこの立場は、一九一八年に土性調査のため訪れた鉛温泉（作品のなかでは鉛の湯）で、〈熊トテモソンナニ〔意地〕悪ク骨マデ喰フ様ナコトハシマスマイ。〉とおどけた言葉を書き付けた、宮沢賢治のそれと似ている※8。なお作品に鉛の湯のほか、淵沢川（実際は豊沢川）、中山街道、大空滝など実在（や類似）の地名が記されること、前述のように「なめとこ山」が近隣に見出されることから、彼がこの山を知っていたことは疑いえない。

さらに旅行者たる僕ら読者も熊にやられることを恐れ、小十郎のようには、なめとこ山に登れない。語り手と作者と読者が指を咥えて山を遠く臨むとき、作品のなかで大空滝は、伝聞した事実として次のように描かれていた。

気をつけてそっちを見ると何だかわけのわからない白い細長いものが山をうごいて落ちてけむりを立てゝゐるのがわかる。

又聞きの事柄を読者に伝える語り手と、鉛温泉以西の地名を想像の世界に構築し直した作者の像が重なる。そして読者である僕らも、「大空の滝／ご苦労さまでした」と案内板から教えられ、何だか分からない細い流れを遠く見やるしかない。つまり作品の語り手と目線を同期させたことになる。以上は、町の人間で現代人である者が、淵沢小十郎と熊との交感の場にいかに遠いかを、よく表している。けれども舞台に遠いということは、語り手や作者にごく近いということでもある。舞台探訪の成否を分けるも

の、それは一つ一つの探訪が作品解釈に資するか否か、だ。その意味合いで、本稿の『なめとこ山の熊』舞台探訪は、成功と胸を張ることができる。語り手と作者の目線へ肉薄し、舞台ではなく舞台そのものを成立させている要件を体験することができたからだ。ただしこのように失敗が必ずしも成功に転じるとは限らない。ここからさきは個々の作品で、あなた自身が、有効な探訪のありようを考えるほかないのだ。

凡例 文章をそのまま引用した場合に「　」を用いた。稿者が自分で定義を設ける場合や、各種文献を参照しつつ語順を変える・類語に換える・省略を行うなどした場合は〈　〉を用いた。また引用に際してルビや傍点は、原則的に省略した。

※1 本稿は「舞台探訪」という言葉を、〈各種作品で設定された土地や場所のモデル地を、実際に訪ね（あるいは探し）歩くこと〉という意味合いで用いている。類語に「文学散歩」や「聖地巡礼」などの言葉がある。前者は、太平洋戦争で灰燼に帰した東京の街々を眼前にした、〈近代文学の歴史は滅び去ったものだろうか〉（野田宇太郎『新東京文学散歩 増補改訂版』一九五二・三、角川文庫）という問いかけのもとで行われた。後者は、「観光客と地域住民の間が単純な消費者と生産者の関係ではなく、協働の仕組みを構築しやすい点に、新しい可能性が指摘できる」（無署名「「聖地巡礼」が導く新しい観光まちづくりのかたち」「三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング」コラム、二〇〇九・九・一四発信、二〇一三・一一・一三閲覧）ものだという。本稿は前者の問い（動機）を共有しておらず、後者の可能性（資源化）を期待しているわけではないため、そのように称することをはばかられる。以上が両者の呼称を採らない理由である。

※2 続橋達雄「なめとこ山の熊 なぜ〈熊〉が登場するのか」（『國文學 解釈と教材の研究』一九八二・二）が根拠を挙げて、「「なめとこ山の熊」は一九二七年の晩秋以後の作となる」と述べた意見に従う。

※3 全一三葉の手入れ（挿入・削除）のある草稿が現存し、一部に切り離しの跡がある。これを復元すると、②と③の挿話は③→②の順から、現状へ改稿されたことが分かる。『【新】校本宮澤賢治全集 第十巻童話Ⅱ 校異篇』（一九九五・九、筑摩書房）、図録『特別展 童話 なめとこ山の熊』（二〇二一・三、宮沢賢治記念館）参照。本文の引用は上記の校本全集による。

※4 丸数字の番号付けは図録を参照（切り離しや空白を確認できる）した。伊藤禎子・鈴木幹生・西野入篤男・脇坂健介・高木信・麻生裕貴・構大樹「「なめとこ山の熊」をどう扱うか」（『日本文学』二〇二二・一）において構は、「なめとこ山の熊」は、高校の教科書の賢治童話としては、早くから採られた作品と言えます。三省堂と筑摩の教科書に採られました」と発言している。なお稿者が、本学二〇二三年度「文学講義三三六」のコメント・ペーパーで、本作を「学校教材として、いつ学んだか」と問うたところ、合計七十六件の有効回答（当講義は主に文学専修系統の学生が履修している）のうち、高等学校や中学校で学んだという回答を各四、小学校で学んだという回答を一、得た。

※5 いささか古い論考ではあるが、注2の続橋論文は、先行研究の概要を以下のようにまとめている。

今までの「なめとこ山の熊」論は、その語り口のこと、熊と小十郎とのかかわり、小十郎と商人の関係という三つの柱から組み立てられ、第二の点が中心的課題として追求されてきた。

右を参照しつつ私見を加えると、先行研究は管見の限りで、①語り②作品の主題③同時代の背景、を重視してきたようだ。

※6 注4の伊藤ほかの議論でも語り手に関する「看板に熊の肝（ママ）があるという情報を見ただけで、ナマの動物に触れあってなどいない人物。商品としてしか触れたことがないんでしょう。しかしこの状況って、逆に「現在のリアル」でもあり、現在の読者に近いのかなと思います」という脇坂の発言がある。

※7 無署名「賢治の『なめとこ山』あった」（『朝日新聞』一九九六・八・一・夕）や、無署名「賢治の童話「なめとこ山」確認、地形図に記載」（『読売新聞』一九九六・八・一・夕）と、「賢治の世界 地図に刻む」（『読売新聞』二〇一九・七・一三・朝）を参照した。なおカタカナ表記の「ナメトコ山」について、原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』（一九九九・七、東京書籍）に詳しい指摘がある。

※8 四月一八日付け工藤又治宛て封書。（　）は校異者により補われたもの。当該箇所を少し長めに引用する。『【新】校本宮澤賢治全集 第十五巻 書簡』（一九九五・一二、筑摩書房）のうち本文篇による。

猿ノ足痕ヤ熊ノ足痕ニモ度々御目ニ（カカリ）マス。実ハ私モピストルガホシイトモ思ヒマシタ。ケレドモ熊トテモ私ガ創ッタノデスカラソンナニ（意地）悪ク骨マデ喰フ様ナコトハシマスマイ。

「私ガ創ッタ」という文言を、いまは措く。なおのち宮沢が「鉛より豊沢、幕館、柱（ママ）沢」と足を延ばしたらしい（七月一七日付け宮沢政次郎宛て葉書）ことを勘案すると、彼と〈町にいる〉語り手の間に少しく違いを認められる。

文学テクストを通したカナダ観光体験

様々な出自を持つ移民とファースト・ネーションとしての先住民族による物語がカナダ文学の特長だ。『赤毛のアン』とフランス語による先住民文学作品『クエシパン』の舞台を訪ねてみよう。

羽生敦子 Hanyu Atsuko　河野美奈子 Kono Minako

モントリオールのウォールアート　撮影：河野美奈子

カナダの小説と言っても、すぐにはなかなか思いつかないだろう。カナダ文学は英語で書かれた作品とフランス語で書かれた作品を含む。二つの言語で書かれるのは16世紀にフランス人探検家の発見を機に植民地化された「カナダ」[※1]が、18世紀、フレンチ・インディアン戦争によりイギリスの植民地へと転換した歴史が反映されているためである。現在ではカナダ社会の多様性を示すように、様々な出自を持つ移民とファースト・ネーションとしての先住民族による物語もまたカナダ文学の特長となっている。

今回取り上げるのは、カナダ文学の代表とも言える『赤毛のアン』と、カナダのフランス語による先住民文学である。

〈赤毛のアン〉という英語小説

カナダ人女性作家L・M・モンゴメリ（Lucy Maud Montgomery, 1874-1942）によって書かれた「アン・シリーズ」の第一巻『赤毛のアン』は、一九〇八年、アメリカで出版された。数度の中断はあるが一九三九年刊行の『炉辺荘のアン』[※2]まで続く。本稿では十一歳から二十二歳までのアンの青春時代を描いた三作に絞って話を進める。すなわち、日本語訳では『赤毛のアン』『アンの青春』『アンの愛情』と名付けられている三作であり、原題はそれぞれ、Anne of Green Gables, Anne of Avonlea, Anne of the Islandである。一連の邦題は、「アン」というキャラクターの存在を前景化する。しかし、英語の原題からは、すべて「場所」と「アン」の物語であることがわかる。原題の一部となっている「島」（The Island）とは、著者本人が少女時代を過ごしたカナダ東部の島、プリンス・エドワード島のこととされる。第一巻『グリーン・ゲーブルズのアン』（『赤毛のアン』）では、十一歳の孤児、つまり自分の場所を持てなかったアンが、マシューとマリラのカスバード兄妹に迎えられ、Green Gables（カスバード兄妹が住む場所の名前）という愛情あふれる場所を見つける。そこは何もない小さな世界ではあるが、アンの「想像の余地」とロマン主義的まなざし[※3]のおかげで、リンゴの木が連なる並木道は「歓びの白い路」、通学路は「恋人たちの小路」、池は「ウィローミア」、窪地は「すみれの谷」、家の窓から見える桜の木は「雪の女王」となり、朽ちかけた橋にも名前が与えられる。テクスト内の場所に次々と記号が与えられていくわけだ。読者の方はそれらの記号を通して、実際の風景を想像する。ここ数年、「ヌン活」[※4]が新しい女子会として話題となっている日本の読者の目には、カスバード家での「お茶会」も印象的に映ることだろう。アンの「アフタヌーンティー」には、ラスベリータルト、サクランボの砂糖漬け、フルーツケーキ、ショウガ入り焼き菓子、ラズベリー水（raspberry cordial）[※5]、スコーン、タフィ、レイヤーケーキ、プラムケーキチキンのゼリーよせ、パウンドケーキなどが登場するが、写真はもちろん、挿絵もない。アンやマリラが作る素朴な郷土料理と同様に、すべてが島を語るテクストをなしている。こうしてカナダの田園風景とイギリス的な文化風景が交差した結果、グリーン・ゲーブルズは訪れるべき場所として周知され、物語の中のアンに誘われるように、その世界を共有しようと多くの観光客が訪れている。

続く二巻目のタイトルは『アヴォンリーのアン』（『アンの青春』）である。グリーン・ゲーブルズはアヴォンリーの中の僻地であったが、アンの成長とともに、物語はより広い地域で展開する。なお、アヴォンリーの首都カーモディは架空の町で、北西部のキャベンディッシュをモデルとしている。そして、十七歳になったアンは友人たちと「改善協会」を立ち上げ、町の景観改善・美化運動に奮闘する。寄付金を集めるために、隣人宅を訪れるアンを通して、住民たちの家族の歴史も披露される。アンの物語からは島の貧しさが感じられないものの、ときどき織り込まれるニューヨークやボストンの話は、島とアメリカの経済格差を感じさせる。十七歳の若者が町の美観運動を立ち上げるとは驚きであるが、おそらくイギリスのナショナルトラスト運動[※6]の影響もあるのだろう。アン・シリーズはこのように、ときに実録風に書かれたテクストである。例えば、島が嵐によって前代未聞被害を受けたときに、マリラが「プリンス・エドワード島始まって以来だよ」（モンゴメリ『アンの青春』２０１９：１９０９、三二五ページ）と悲嘆にくれる場面がある。読者はあらためて現実のプリンス・エドワード島の存在を感じずにはいられない。

第三巻目のタイトルは『島のアン』（『アンの愛情』）、アンは、プリンス・エドワード島に隣接するノヴァ・スコシア州の首都キングスポートにある

グリーン・ゲーブルズ・ハウス（カナダ国定史跡）　撮影：大石太郎

プリンス・エドワード島名産のジャガイモとその博物館　撮影：大石太郎

フランスの支配からイギリス支配へと、占領下をくぐりぬけて立ち上がってきた島であることが読者に伝えられる。

アンはノヴァス・コシア州生まれとはいえ、十一歳まで孤児院や親戚の家を転々とし、「想像の世界」を糧に生きた少女である。十一歳の時に島へと移った結果、幸運にも想像の世界が現実化し、幸せな少女時代を過ごした。そして少女時代が終わるころ、新しい場所が与えられる。都市である。キングスポートという都市の風景を目前に「ここよりもきれいなところなんて……あるのかしら……ありうるのかしら（前掲書、一七ページ）」とうっとりする一方、語り手は「たとえ異郷の星のもとに、さらに風光明媚な土地があろうとも、「ふるさと」こそが、永遠に、世界のどこよりも美しいと信じる者の目をしていた」（同前）と述べ、島とアンを結びつける。

前述のとおり、プリンス・エドワード島には、アンの世界を求める巡礼者が後を絶たない。これら三冊のテクストはアンの成長記録であることはもちろんだが、「島」のガイドブック的な役割も兼ねているのだ。

ところで、同化政策によって苦しめられた先住民をファースト・ネーションとして保護し、共生社会を築こうとするカナダ社会にとって、このテクストには「ある欠如」があると指摘されている。カナダの先住民族の生活が全く登場しないことである。小説、つまりフィクションなので、現実との乖離があるのは当然とはいえ、プリンス・エドワード島のガイドブックとして読まれている以上、修正を求める声もある。これまでも、映画化やアニメ化の形で多くの二次創作が行われているアンの物語であるが、二〇一七年に制作され、翌年からネットフリックスで配信が開始された『アンという名の少女』では、先住民族に対する同化政策の愚かさ、フレンチ・インディアン戦争でフランスが負けたあとに居残ったフランスレッドモンド大学の大学生である。キングスポートは首都ハリファックスをモデルとしている。アンの下宿から見える旧セント・ジョン墓地は「気持ちのよい散歩道」に変わっており、キングスポートの「観光名所」として紹介される。「公園には、海岸防備の円形砲塔があり、いたるところに、旅行者の名前が書かれている」（モンゴメリ『アンの愛情』二〇一九：一九一五、四五ページ）。「観光名所」へと赴き、そのいたずら書きを見るアンもまた外部から来た学生（＝旅行者）なのである。次第に少女のまなざしはキングスポートへ向かうよりむしろ「島」へと投射する再帰的なまなざしへと変化する。これに伴い、第四章では「島」の歴史が語られる。もともと先住民の住む、原生林が広がる地域であったことや、十八世紀に

小説の舞台：カナダ東部ケベック州とプリンス・エドワード島

（　）は小説のなかの地名。キャベンディッシュ（アヴォンリー）：グリーンゲーブルズのカスバード家に引き取られたアンが少女時代を過ごすまち。ハリファックス（キングスポート）：アンが大学生活を送るまち。アンは初めての都市の生活を知る。

系カナダ人と英系カナダ人の関係をテーマに加えるなど、原作が再構成されている。

三巻目に当たる『アンの愛情』のあとがきで、訳者の松本侑子は、「『アンの愛情』の舞台が実在すること、またその町がハリファックスであることはあまり知られていないようです」（前掲書、四六二ページ）と愛読者の「島」へのこだわりを匂わせる。当然、アン・シリーズのファンであれば、全九巻および関連書二巻を読破しているだろうし、ギルバートと結婚し、娘も生まれる大人のアンも知ってはいる。にもかかわらず、第一巻の『赤毛のアン』こそが、読者の求める永遠のアンの姿であり、その意味で彼女はいつまでも島にいる少女でなければならないのだ。二次創作によって、島というテクストそのものは再構成されるにせよ、巡礼の地は、これからもプリンス・エドワード島の外に出ることはないだろう。アンの島＝プリンス・エドワード島という構図はこれからも変わらない。

祖先の記憶をたどる旅へ

カナダにおける先住民文学の歴史はまだ浅い。彼らの文学作品が注目されるようになったのは一九七〇年代に入ってからのことである。原因としてまず挙げられるのは、先住民の多くが口承で自らの部族の物語を子孫へと伝えていたことである。そして何よりも先住民への関心の低さも、先住民文学が広く認知されるのを妨げていたと考えられる。二十世紀後半にアメリカで起きた先住民の人権運動をきっかけとして、カナダでも先住民への民族的関心が高まり、彼らの作品が多く出版されることとなった。多くの人に読まれることになった先住民文学は二十一世紀に入り立て続けに出版されるようになった※7。とくに二〇二一年には先住民の子供のための寄宿学校跡地から多くの子供の骨がみつかったことにより、カナダで先住民に対する反省と理解が進み、各地で先住民芸術をテーマとした催しが開かれた※8。この年は先住民文化の「ルネッサンス」と言われるほどに彼らの文化へ注目が注がれたのである。

今回取り上げる作品はカナダのケベック州で現在最も注目されている作家ナオミ・フォンテーヌ（Naomi Fontaine, 1987–）の『クエシパン』（*Kuessipan*, 2011）である。二〇一九年には『クエシパン』から着想を得た映画も制作された。フォンテーヌはケベック州で三番目に人口の多いファースト・ネーションズのイヌーの作家である※9。彼女はケベック東部セティルにある先住民居留区ウアシャットに生まれた。

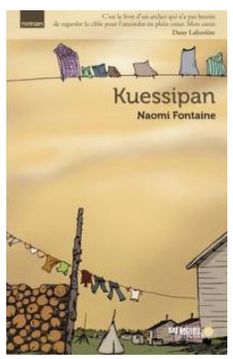
『クエシパン』は小説ではあるが、一続きのストーリーがあるのではなく、先住民の世界を断片形式で描いた作品である。登場人物には、居留地に住む「私」や「少女」や「年老いた男」など固有の名前が与えられていない。名前を持たないことでその存在の輪郭が掴みづらい印象を読者に与えるかもしれない。しかしそれは、フォンテーヌが意図したことである。現代の先住民の世界を描く際に固有の名前を書くことは、リスクを孕んでいるのである。居留地で引き起こされる問題は現在でも続いており、固有の名前を与えることで「誰か」が特定されることは避ける必要がある。作品のなかでも居留地で起きている問題は暗示的に表現されている。

> なぜだろう。夜、彼女の眠る際の重苦しい眠気が、額をまくらという砂丘のなかにまでを埋め込んでいく。彼女の顔は閉じた部屋の暗さのなかで震える。誰かが声を強めた途端、彼女は体をこわばらせる。恐怖は彼女を母親の悪夢のなかへと追い立てる。彼女は泣き、慰める者はいない。彼女は忘れる。彼女は笑う。
> 私は分かっていると彼女に伝えたい。私はなぜか口をつぐむ。
> 沈黙。私はその沈黙を書きたい。
>
> （『クエシパン』、一六ページ）

夜、少女の寝室の扉の向こうでは母親が誰かと話している。少女はすでにただならぬ空気を感じ取っており、暗闇のなかで枕に額を埋め、その声を聞かないようにしているが、心配で眠ることができないでいる。そこでは母親と誰かとの諍いが始まり、少女は恐怖のなかで涙を流す。この場面が想起される家庭内暴力は、居留地で頻繁に起きている出来事である。仕事がないことによる貧困ゆえのアルコールやドラッグの使用、または若者の自殺率の高さや、就学率の低さは現代の居留地では非常に深刻になっている。居留地で生まれ七歳まで過ごし、そしてフランス語教員となって居留地に戻ってきたフォンテーヌにとって、貧困をめぐる諸問題はいま目の前で起きている課題なのである。少女は居留地の問題のただなかにいるが、「私」もまたそのなかにいると考えられる。暴力や貧困に対して悲しむ少女はやがてそれらの問題に対して諦め、受け入れるようになる。解決の糸口が見えないゆえに「私」は口をつぐむのだが、それは居留地の問題を甘受するのではない。「私」の「口をつぐむ」という行為には少女への共感とともに悲しみや怒りといった感情が混在していると考えられる。その複雑な沈黙が「私」の描きたいものであることが明かされる。フォンテーヌが提示するのはイヌーが現在抱えている問題である。しかし、同時に彼女は祖先の記憶をたどることも重要であると考えている。

かつてイヌーがおこなっていた移動（ノマド）生活に関して非常に現代的なアプローチも『クエシパン』では描かれている。それがノマド体験ツアーである。作品内では、キャリアを重ね、村の評議員にもなった四十歳の女性がツアーに参加する。彼女はかつて祖先がおこなっていたように森を歩き続けるが、すぐにツアーが嫌になり、もとの快適な生活に戻りたいと思い始める。彼女は旅の途中で鏡を取り出し、変わり果てた自分の姿に驚いた。

> 肌は日に焼け、髪は油でかたまり、眉毛は抜けていて、疲れてしまったように見える自分を見た。
> そんな自分の姿が嫌になり、顔は一変した。ほんの少しの間、そこに慣れ親しんだ意志の強い姿を見たように思った。彼女が知っているその眼差しは、彼女に命を与えてくれた女性



『クエシパン』の表紙
（Mémoire d'encrier, 2011）

のものだった。
船を漕ぎ、歩き、荷を運び、野営をし、食べ、寝て、出発し、船を漕ぐ。それが彼女の生活だった。しばらくの間彼女が選んだ生活だった。祖先からの借りものの。

（『クエシパン』、七三‐七四ページ）

短い期間の野営生活でも彼女の顔はすっかり変わっていた。自分の姿に嫌気が差すのだが、同時にその疲れ果てた顔に母親の表情を見る。母そしてその先にある祖先の記憶が突如として彼女に降り掛かってきたのである。かつてのイヌーの家族がおこなってきた生活を追体験することにより、ようやく彼女は祖先と記憶を共有することができたさまがここに描かれている。しかし、それは一時のことであり、「祖先からの借りもの」である。彼女はツアーを終えると、もとの何不自由ない生活に戻るが、それでも祖先への道を辿った経験は、ツアー参加前とは異なるイヌーに対する意識を彼女のなかで呼び起こしたと言っていいだろう。

現代に生きるイヌーの人々にとって、完全なるノマドに戻ることは非現実的である。だが、ノマドである意識を放棄してはならないという現代のイヌーへのフォンテーヌによる呼びかけとしてこの箇所を読み取れるのなら、そこで示されるのは、祖先からの記憶を受け継ぎ、そして次の世代へ伝える自覚を持つことの意義である。そして祖先の土地が重要であると『クエシパン』では描かれている。小説の最後で祖先の地に立ったイヌーの人々の目の前に広がるのは、非常に澄み切った空間である。

霧もなく、雨もなく、いきるものを窒息させるような重い過去もない。私達の未来の夢を取り巻く静寂さ。海岸と潮汐の近くには私たち、私の息子がいるだろう。

（『クエシパン』、一〇九ページ）

先住民社会を取り巻く現代の問題を提示しつつも、フォンテーヌは祖先の記憶、祖先の地を求め続けている。祖先から受け継いだものこそ、イヌーの人々に明るい未来を残すと最後には描かれている。

ナオミ・フォンテーヌは現代の先住民の抱える諸問題を提示し、変わってしまったイヌーの人々の生活を描きながらも、ノマドであるという意識を忘れることはないと作品で示している。都市の生活に慣れた若き作家であっても、イヌー、先住民の人々にとって土地は軽視することができない重要な場であることが作品では描かれている。

以上のように年代も舞台も異なる作品を分析したが、『赤毛のアン』においても『クエシパン』においてもカナダの自然、及び大地が作品において重要な要素であることは特筆すべき点である。前者にとって、自然は主人公アンによる想像の源となり、彼女が名付けたあらゆる場所は想像世界となって作品のなかで広がっていく。後者にとって、ケベックの自然は先住民のアイデンティティと密着なつながりを持っている。フォンテーヌのように生まれたときから街に住み、森での生活を経験したことがない世代であっても彼らが自らの根源を求めるときに森やそこに住む者たちへと眼差しが向けられている。

参考文献

L・Mモンゴメリ（一九〇八）『赤毛のアン』*Anne of Green Gables*（『赤毛のアン』1）、松本侑子新訳（二〇一九）、文春文庫

――（一九〇九）『アンの青春』*Anne of Avonlea*（『赤毛のアン』2）、（二〇一九）

――（一九一五）『アンの愛情』*Anne of the Island*（『赤毛のアン』3）、（二〇一九）

Naomi Fontaine, *Kuessipan*, Mémoire d'encrier, Québec, 2011.

※1 当時はヌーヴェル・フランス（Nouvelle France）と呼ばれ、国名カナダは先住民の言葉である。

※2 『炉辺荘のアン』Anne of Ingleside は三十三歳から三十九歳までのアンの物語だが、その二十年前の一九一九年に出版された『虹色の谷のアン』Rainbow valley では四十から四十一歳のアン、また一九二一年出版の『アンの娘リラ』Rilla of Ingleside の中では四十八歳から五十三歳のアンが描かれている。さらに二〇〇九年には、モンゴメリが一九四二年に亡くなる直前に書き上げた『アンの思い出の日々』The Blythes Are Quoted が VikinCanada より出版され、四十から七十五歳までのアンが描かれる。アン・シリーズは九巻あり、『炉端荘のアン』は、出版順では第八巻目にあたる作品。

※3 イギリスの観光社会学者ジョン・アーリが『観光のまなざし』（一九九五）の中で、イギリスにおける近代観光の萌芽とロマン主義運動の関係を論じる際に用いた表現。ロマン主義的まなざしとは、自然を称賛の対象とし、風景として楽しむまなざしであった。現在のツーリストのロマン主義的まなざしは、主体も場所も事例も広域にわたるが、グリーン・ゲーブルズの自然風景に魅了されたアンのまなざしはイギリス的なロマン主義的まなざしである。よそ者であったアンは日常の自然風景を非日常の美しい風景としてまなざしている。

※4 アフタヌーンティー活動の略語。アフタヌーンティーをホテルなどで体験すること。

※5 アンが友人ダイアナを初めて自宅に招待した際に、「ラズベリー水」を「カシス酒」と間違って飲ませてしまう。ダイアナの両親の怒りを買い、大事件となってしまった。この章が有名なこともあり、ラズベリー水はアン観光の購入必須アイテムとなっている。

※6 貴重な自然環境をとどめている土地や優れた文化財を、地域住民らが募金を集めて買い取ったり、寄贈したりして保護・管理していく運動のこと。十九世紀末にイギリスで発祥した。

※7 二〇〇〇年代に入り、カナダにおける先住民の人権意識がより高まったことが大きな要因の一つであるが、それと同時に先住民作家の作品を積極的に出版する出版社の存在も無視できない。ケベック州ではメモワールダンクリエやアネノラクなどがその代表である。

※8 二〇二一年五月、カナダのブリティッシュコロンビア州のカムループスで先住民の子どものための寄宿学校跡地から子供の骨二一五体が掘り起こされたことにより、カナダ各地で寄宿学校の問題が取りざたされた。劣悪な環境や虐待により多くの子供が亡くなったと考えられている。問題は更に膨らみ、各地で寄宿学校の設立に関わった人物の像がなぎ倒されるという騒動にまで発展した。寄宿学校はキリスト教団が運営をしていたため、二〇二二年七月ローマ教皇がカナダに赴き、寄宿学校から生き延びた人々を前にして謝罪をおこなった。

※9 カナダの先住民は一九八二年の憲法により、ファースト・ネーションズ、イヌイット、メティスの三つの集団に分類されている。ファースト・ネーションズはイヌイットとメティス以外の先住民を指し、カナダの先住民の約六〇％を占めている。イヌイットはカナダの寒冷地に住む人々である。メティスは十七世紀のはじめに入ってきたヨーロッパ人とファースト・ネーションズとの混血である。彼らはすでに独自のコミュニティを形成し固有の文化を持っている。

ナオミ・フォンテーヌの作品『MANIKANETISH』のポスター　撮影：佐々木奈緒

観光文学ブックリスト

観光文学研究会 編

観光文学の世界に分け入るとき、読む（文学）に先んじて歩く（観光）のは、観光学の特権だが、歩いてから読むとまた歩きたくなる、さまざまな本がある。このブックリストでは、旅行記や紀行文学などの「作品」そのもの、それらを文学的観光学的に「研究」したもの、作品世界を歩く「ガイド」本、の３種類に分け、紙幅の関係でそれぞれ数冊ずつだが紹介を試みた。これらを手がかりに、本の森へ比喩的にでなく、実際に足を踏み入れてほしい。

作品

デイヴィッド・ロッジ（1993）
『楽園ニュース』
……白水社

ミステリ等のエンタメ小説で観光が背景になったり、観光に関わる職業を通してその舞台裏が物語の素材になったりすることはあっても、観光者を正面から取り上げた小説は珍しい。現代イギリスの作家ロッジが1991年に発表した本書は、女性問題につまずいて還俗した元神父である主人公が、移住先のハワイで死に瀕している親戚を見舞うため観光ツアーに参加するという設定で、現代における宗教と観光の関係を軽妙に描き出している。

研究

前田愛（2006）
『幻景の街――文学の都市を歩く』
……岩波書店

岩波現代文庫に入った本書は、戦直後の文学散歩と21世紀のコンテンツツーリズムのちょうど中間に位置する、都市論的観光文学研究の代表作である。明治の鴎外から昭和の田中康夫まで、17本の作品概要と作家略歴を備え、同じ著者の『都市空間のなかの文学』という理論篇につづく実践編として、作品のなかに描かれた幻景の街が復原されて行く。

ガイド

川本三郎（2005）
『図説永井荷風』
……河出書房新社

ふくろうの本は新潮社のとんぼの本とともに、ビジュアルブックとして作家たちのまなざしを伝える書目を揃えている。本書は1980年代都市論時期から出版されている雑誌『東京人』でもたびたび取り上げられる街歩きの先達、永井荷風の作品について、『日和下駄』(1915)『濹東奇譚』(1937) から、40年以上書き継がれた『断腸亭日乗』などを手掛かりに、作品の街を絵解きする。川本は今日に至るまで観光文学に関心を寄せる評論家で、前田愛『都市空間のなかの文学』と奥野健男『文学のおける原風景』、磯田光一『思想としての東京』を文芸評論の新しい波と捉えたが、こうした視点は観光文学のコンテンツツーリズム研究へもそっくり引き継がれている。

研究

アラン・コルバン、渡辺響子 編（2010）
『レジャーの誕生 新版』
……藤原書店

産業革命によって、労働者に新しい生活の空白時間（余暇）が現れる。「楽しみのための」時間という概念の誕生だ。そこから気晴らしのための産業（ツーリズム）が出現する。こうした19世紀以降の変遷について、アナール歴史学派の社会学や地理学を交えた観点から鉄道、健康、ビーチリゾート、そして文化的風潮であったロマン主義などが論じられる。パリ大改造は、観光という近代産業の仕業だったのだ。

作品

田山花袋（2012）
『東京近郊 一日の行楽』
……社会思想社

現代教養文庫として電子書籍でも読める本書は、『東京百年散歩』という魅力的なタイトルで「東京とその近郊」のみでも出版されている（辰巳出版、2011）。自然主義小説家花袋が、紀行文を多く手がけたことは意外に思われるかもしれない。本書は百年以上前に発表された、東京を起点に鉄道と徒歩で日帰りか2泊までの小旅行について「出来るだけ踏査をした」紀行文学である。会話を交えた手法が読み物性を高めているが、紀行文は「地図の精確」と「絵画の妙味」を備えるべきという花袋の主張と、写実を旨とする自然主義小説は矛盾しない。

研究

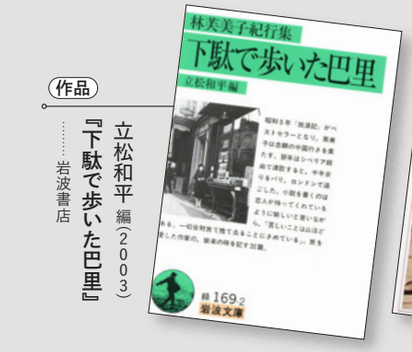
鈴木智之（2021）
『郊外の記憶――文学とともに東京の縁を歩く』
……青弓社

東京の郊外を舞台とする小説を読みながら、それを手がかりとして街を歩き、それぞれの地域で時間と空間の結び付きを再発見しようとする文学社会学の試み。作品に刻まれた土地の記憶と物語の力を、多和田葉子ら現代作家の作品から探る。書名の通り、中心部でなく郊外（周縁）にこだわるのは、著者の実家を出た独立後の実生活と、先行する沖縄文学研究が関わるが、そこでは「都市空間」に終始した文学散歩や都市論が拡張されている。

ガイド

金井景子 ほか（2016）
『浅草文芸ハンドブック』
……勉誠出版

文学部のフィールドワークでも標準的なガイドである本書は、浅草らしさとは何かを、浅草を舞台とした小説から映画、演芸、人物まで、広く文芸として扱っている。インタビューと文芸選、場所に関わるコラムで構成され、これらの断片や実際の歩くという「修練」によって、作品そのものに導かれた人は、山田太一編『土地の記憶　浅草』(岩波現代文庫、2000) などをひもといてほしい。



作品

立松和平 編（2003）
『下駄で歩いた巴里』
……岩波書店

作品

今川英子 編（2004）
『巴里の恋――巴里の小遣ひ帳、一九三一年の日記、夫への手紙』
……中央公論新社

1931年、林芙美子は憧れのパリへと旅立つ。豊富な資金はない。船旅より運賃の安いシベリア鉄道の旅だ。鉄道に乗るため東京からハルピンまで「4日間の旅マエ」もある。ハルピンからパリまでの「旅ナカ」のツーリスト芙美子と、パリ滞在中約半年の生活者芙美子が描かれるのが『下駄』である。『巴里』では、彼女が書いた日記、手紙から、パリを目指したもうひとつの理由が明らかになる。彼女は恋愛体質の女性でもあったのだ。この2冊からは戦前のパリの風俗も知ることができる。

ガイド

朝霧カフカ 監修（2020）
『文豪聖地巡礼』
……立東舎

代表的な文豪コンテンツとして、多くの文学館でもオンラインゲーム『文豪とアルケミスト』と共にキャラクターが活用されることの多い朝霧らによる漫画『文豪ストレイドッグス』に因んだ文豪聖地の巡礼ガイド。『文アル』には『ぴあ ゆかりの地めぐり』(2018) や『ごはん帖』(2018) などがあるが、元々読み物である『文スト』では『公式国語便覧』(2016) より、本書の読み応えがある。文学を起点としたメディアミックスは、狭く浅い紹介に陥りがちな国語教科書定番作家に留まらず、読まれなくなった作家にまで読者の裾野を広げ、文学を延命させる可能性を持っている。

ガイド

野田宇太郎（2015）
『新東京文学散歩』
……2冊、講談社文芸文庫

詩人で文芸評論家の野田は戦後の焼け跡に立ち尽くし「近代文学の基礎を築いた先人達の記録を作ろう」と考える。焼け跡の写真は進駐軍の検閲が厳しく、代わりにスケッチが添えられるような時代だった。「文学散歩」というフランス語由来の造語は、アニメ聖地巡礼などコンテンツツーリズムの先駆である。本書を携え、いまの東京を歩いてみる藤井淑禎『「東京文学散歩」を歩く』(ちくま新書、2023) など、改めて野田文学散歩に注目した著作も少なくない。

立教大学観光学部の教員・学生が執筆しました

大学的東京ガイド こだわりの歩き方

世界でも有数の観光地である東京を、観光学と関連の深い「歩く」「まなざす」「集う」という3つのテーマから考察しました。執筆には観光学部の専任教員だけでなく学生も関わっており、さまざまな角度から東京の姿が浮き彫りにされています。東京の学術的な分析に関心がある読者はもちろんのこと、大学で観光学を学びたいと考えている高校生や、実際に観光学を学んでいる大学生にも興味を持ってもらえる一冊です。

立教大学観光学部 編
昭和堂刊
2019年3月30日刊行
定価　2,200円＋税

観光学の最新トレンドや学部の取り組みを紹介

RT

本誌は、2005年から2018年にかけて計17冊が刊行された『交流文化』のあとを受け、2021年に創刊されました。毎号、観光学部の専任教員による責任編集のもと、観光学の最前線に関わる特集テーマを掲げ、観光学の最新トレンドや観光学部の取り組みを読者のみなさんにわかりやすく提示していきます。記念すべき第1号の特集は、「ポストコロナ時代の観光学」。学外の研究者も積極的に執筆陣に迎え、今後ともいっそうの充実を図ります。

第1号
特集：ポストコロナ時代の観光学
第2号
特集：スマート・ツーリズム

『交流文化』バックナンバー

観光学部は、2006年度の交流文化学科開設を機に、交流文化の視点から観光を読み解くことのおもしろさをひろく伝えるため、2005年から2018年にかけて計17冊の『交流文化』を世に送り出しました。バックナンバーはウェブサイトからも読むことができます。
https://tourism.rikkyo.ac.jp/about/exchange_culture.html

第1号
特集：西双版納（中国・雲南省）で交流文化を考える

第2号
特集：街角の交流文化
ロンドン、ウィーン、クアラルンプール、東京

第3号
特集：交流が生む食のかたち

第4号
特集：交流拠点としてのホテル

第5号
特集：フィールドワークが問いかけるもの

第6号
特集：ヒル・ステーション

第7号
特集：観光と歴史

第8号
特集：観光 グローバルVSローカル

第9号
特集：温泉クロニクル

第10号
特集：乗り物とその世界

第11号
特集：旅の記録

第12号
特集：「観光」の可能性

第13号
特集：世界遺産

第14号
特集：巡礼

第15号
特集：おみやげ

第16号
特集：ミュージアム

第17号
特集：景観

編集後記

日本における最初の観光学部として、観光学の領域創造と拡張は欠かせないが、2006年に交流文学（旅文学）として取り組みを始めた「観光文学」は、旅行記や紀行文を読むだけでなく、広くトラベルライティングを対象に、現実と虚構の関係を批判的かつ生産的に問い直す試み、文学研究はもちろん、ポストコロニアリズムやエコクリティシズムなどの文化研究を含んでいる。本誌で触れた「文学散歩」「聖地巡礼」「テクスト分析」を手がかりに、経験一般を合理化する装置である「観光」によって産み出される重層性に気づき、それらを解読してほしい。文系学部はその大部分が読書で成り立っているが、読書はそもそも他者の見聞に触れるという意味で旅であり、読書そのものが読者にどのような観光体験を提供するか考察することができる。「書を捨てよ、町へ出よう」とは、町そのものを書物のように読もうという呼びかけだったのだ。

RT no.3

2024年4月1日発行

発行者　松村公明
責任編集　石橋正孝

発行所
立教大学観光学部
〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375
https://tourism.rikkyo.ac.jp

制作　株式会社フィールドワークス
デザイン　望月昭秀
印刷　こだま印刷株式会社

＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。
ⓒ2024 College of Tourism, Rikkyo University
Printed in Japan
ISBN-978-4-9905878-6-4

筆者紹介（執筆順）

石橋正孝（いしばしまさたか）
立教大学観光学部交流文化学科准教授。専門は近現代フランス文学、観光文学。著書に『〈驚異の旅〉または出版をめぐる冒険』（左右社 2013）等。訳書にヴェルヌ〈驚異の旅〉コレクション全5巻（インスクリプト、監訳と翻訳）、ビュトール〈レペルトワールI・II・III〉（幻戯書房、監訳）等。

小林実（こばやしみのる）
十文字学園女子大学教育人文学部文芸文化学科教授。専門は翻訳文学、ロシア文化受容。主著に『明治大正露文化受容史—二葉亭四迷・相馬黒光を中心に—』（春風社 2010）、『神西清の散文問題』（春風社 2019）。

羽生敦子（はにゅうあつこ）
立教大学観光研究所・白百合女子大学言語・文学研究センター研究員。専門はフランスとケベック州の観光文化と観光文学。近著は「日系ケベック人作家Aki Shimazakiとパンタロジー」（白百合女子大学言語文学研究センター22号）。

原一樹（はらかずき）
京都外国語大学国際貢献学部グローバル観光学科教授。専門は観光倫理学・観光文学、哲学・倫理学。近年の論文に「観光倫理研究の現状と課題—英語圏の先行研究と自然・人間・社会の複雑さを踏まえて」（観光学評論 2022）等。

舛谷鋭（ますたにさとし）
立教大学観光学部交流文化学科教授。専門は観光文学、中国語圏文学研究。共著に『マレーシアを知るための58章』『シンガポールを知るための65章』（明石書店）『東南アジア文学への招待』（段々社 2001）。

安田慎（やすだしん）
高崎経済大学地域政策学部准教授。専門は中東・イスラーム地域研究、観光史。著書・編著に『イスラミック・ツーリズムの勃興：宗教の観光資源化』（ナカニシヤ出版 2016）、『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク：イスラームのゆくえ』（春風社 2021）等。

抜井ゆかり（ぬくいゆかり）
立教大学観光学部兼任講師。専門は観光文学、観光情報、観光広報。主著に「テキストマイニングを用いたトラベルライティング分析による観光シソーラスの構築」（首都大学東京紀要 2012）。調査報告に「港区シティプロモーション推進事業 調査報告書」等。

渡辺憲司（わたなべけんじ）
立教大学名誉教授。専門は江戸時代の文学・文化・風俗史。著書に『近世大名文芸圏の研究』（八木書店 1997）『生きるために本当に大切なこと』（角川文庫 2022年『江戸の岡場所－非合法<隠売女>の世界』（星海社新書 2023）。

椋棒哲也（むくぼうてつや）
立教大学文学部文学科日本文学専修兼任講師。日本学研究所研究員。専門は近現代日本文学。報告「舞台探訪の動画は文学講義に資するか—志賀直哉「城の崎にて」鑑賞を中心に—」（『動画で深める学び—教材から授業を変える—』2018・10、立教大学 大学教育開発・支援センター）がある。

河野美奈子（こうのみなこ）
立教大学外国語教育研究センター准教授。専門はケベック先住民文学、20世紀フランス文学。主著に「イヌー文学における«silence»と«guérison»をめぐって」（日本ケベック学会紀要『ケベック研究』第14号）等。

RT

College of Tourism, Rikkyo University

RT 観光文化 College of Tourism, Rikkyo University No.3